

小泉八雲の世界
(有名な短編集)

はじめに

さて、今回の『小泉八雲の世界』（有名な短編集）という作品は、特に有名な「雪女」をはじめ、「……貉、葬られたる秘密、耳無芳一の話、幽霊滝の伝説、おしどり、忠五郎のはなし、常識、術数、雉子のはなし、おかめのはなし、蠅のはなし、死霊、生霊、お貞のはなし、橋の上で、ろくろ首」と、いろいろな作品があるかと思う。

ところで、小泉八雲という人は、本名（イギリス名）は「ラフカディオ・ハーン」という人であり、イギリス人の軍医の父とギリシャ人の母の間にギリシャで生まれ、その生没年は「一八五〇〜一九〇四年（明治三七年）」で、主に明治時代に活躍して五十四歳で亡くなっています。そして、その作品の特徴としては、その多くは『怪談』話になっているかと思いますが、興味や関心がありましたら、ぜひとも訪ねて見てください。

令和六年四月吉日（決定版）

如月翔悟

目次

小泉八雲の世界
(有名な短編集)

はじめに

- 一、 雪女
- 二、 貉むじな
- 三、 葬られたる秘密
- 四、 耳無ほういち芳一の話
- 五、 幽霊滝の伝説
- 六、 忠五郎のはなし
- 七、 おしどり
- 八、 常識
- 九、 術数
- 十、 雉子きじのはなし
- 十一、 おかめのはなし
- 十二、 蠅はえのはなし
- 十三、 死霊
- 十四、 生霊いきりよう
- 十五、 お貞さだのはなし
- 十六、 橋の上で
- 十七、 ろくろ首

※ 参考文献

雪女
(小泉八雲)

目次

小泉八雲の世界

雪女

- 一、武蔵のある村に「茂作と巳之吉」という二人の木こりがいた
- 二、ある寒い晩帰り途で大吹雪に遭遇し渡し守の小屋に避難した
- 三、ふと目が覚めると一人の白装束しろしょうそくの女が茂作の上に屈かがんでいた
- 四、翌朝、渡し守が小屋に戻って来ると二人の倒れた姿を見つめる
- 五、家に帰る途中で偶然同じ途を旅する一人の若い女に出合う
- 六、お雪は巳之吉みのきちのよき嫁となり男女十人の子供の母ともなる
- 七、ある晩子供等こどもらが寝たあとで巳之吉みのきちはあの日のことを語り始める

※ 参考文献

雪女

(小泉八雲)

一、武蔵のある村に「茂作と巳之吉」という二人の木こりがいた

武蔵の国のある村に茂作、巳之吉という二人の木こりがいた。この話のあった時分には、茂作は老人であった。そして、彼の年季奉公人であった巳之吉は、十八の少年であった。毎日、彼等は村から約二里離れた森へ一緒に出かけた。その森へ行く道に、越さねばならない大きな河があり、そして渡し船があった。渡しのある処にたびたび、橋が架けられたが、その橋は洪水のあるたびごとに流された。河の溢れる時には、普通の橋では、その急流を防ぐ事はできなかった。

二、ある寒い晩帰り途で大吹雪に遭遇し渡し守の小屋に避難した

茂作と巳之吉はある大層寒い晩、帰り途で大吹雪に遇った。渡し場に着いたら渡し守は船を河の向う側に残したままで、帰った事が分った。泳がれるような日ではなかった。それで木こりは渡し守の小屋に避難した。避難処の見つかつた事を僥倖(幸い)に思いながら、小屋には火鉢はなかった。火をたくべき場処もなかった。窓のない一方口の、二畳敷の小屋であった。茂作と巳之吉は戸をしめて、蓑をきて、休息するために横になった。初めのうちはさほど寒いとも感じなかった。そして、嵐はじきに止むと思つた。

老人はじきに眠りについた。しかし、少年巳之吉は長い間、目をさましていて、恐ろしい風や戸にあたる雪のたえない音を聴いていた。河はゴウゴウと鳴っていた。小屋は海上の和船のようにゆれて、ミシミシ音がした。恐ろしい大吹雪であった。空気は一刻一刻、寒くなって来た。そして、巳之吉は蓑の下でふるえていた。しかし、とうとう寒さにも拘らず、彼もまた寝込んだ。

三、ふと目が覚めると一人の白装束の女が茂作の上に屈んでいた

彼は顔に夕立のように雪がかかるので眼がさめた。小屋の戸は無理押しに開かれていた。そして雪明かりで、部屋のうちには女、全く白装束の女、を見た。その女は茂作の上に屈んで、彼に彼女の息をふきかけていた。そして彼女の息はあかるい白い煙のようであった。ほとんど同時に巳之吉の方へ振り向いて、彼の上に屈んだ。彼は叫ぼうとしたが何の音も発する事ができなかった。白衣の女は、彼の上に段々低く屈んで、しまいに彼女の顔はほとんど彼にふれるようになった。そして彼は、彼女の眼は恐ろしかったが、彼女が大層綺麗である事を見た。しばらく彼女は彼を見続けていたが、やがて彼女は微笑し、そしてささやいた。「……私は今ひとりの人のように、あなたをしようかと思つた。しかし、あなたを気の毒だと思わずにはいられない、あなたは若いのだから。……あなたは美少年ね、巳之吉さん、もう私はあなたを害しはしません。しかし、もしあなたが今夜見た事を誰かに、あなたのお母さんにでも、言つたら、私に分ります。そして私、あなたを殺します。……覚えていらつしゃい、私の言う事を……」

そう言つて、向き直つて、彼女は戸口から出て行つた。その時、彼は自分の動ける事を知つて、飛び起きて、外を見た。しかし、女はどこにも見えなかつた。そして、雪は小屋の中へ烈しく吹きつけていた。巳之吉は戸をしめて、それに木の棒をいくつか立てかけてそれを支えた。彼は風が戸を吹きとばしたのかと思つてみた。彼はただ夢を見ていたかもしれないと思つた。それで入口の雪あかりの閃きを、白い女の形と思ひ違ひしたのかもしいれないと思つた。しかもそれもたしかではなかつた。彼は茂作を呼んでみた。そして、老人が返事をしなかつたので驚いた。彼は暗がりへ手をやつて茂作の顔にさわつてみた。そして、それが氷である事が分つた。茂作は固くなつて死んでいた。……

四、翌朝、渡し守が小屋に戻つて来ると二人の倒れた姿を見つける

あけ方になつて吹雪は止んだ。そして日の出の後少ししてから、渡し守がその小屋に戻つて来た時、茂作の凍えた死体の側に、巳之吉が知覚を失うて倒れているのを発見した。巳之吉は直ちに介抱された。そして、すぐに正気に歸つた。しかし、彼はその恐ろしい夜の寒さの結果、長い間病んでいた。彼はまた老人の死によつてひどく驚かされた。しかし、彼は白衣の女の現れた事については何も言わなかつた。再び、達者になるとすぐに、彼の職業に歸つた。毎朝、独りで森へ行き、夕方、木の束をもつて歸つた。彼の母は彼を助けてそれを売つた。

五、家に歸る途中で偶然同じ途を旅する一人の若い女に出会う

翌年の冬のある晩、家に歸る途中、偶然同じ途を旅している一人の若い女に追いついた。彼女は背の高い、ほっそりした少女で、大層綺麗であつた。そして巳之吉の挨拶に答えた彼女の声は歌う鳥の声のように、彼の耳に愉快であつた。それから、彼は彼女と並んで歩き、そして話をし出した。少女は名は「お雪」であると言つた。それからこの頃両親共なくなつた事、それから江戸へ行くつもりである事、そこに何軒か貧しい親類のある事、その人達は女中としての地位を見つけてくれるだろうという事など。巳之吉はすぐにこの知らない少女になつかしきを感じて来た。そして見れば見るほど彼女が一層綺麗に見えた。彼は彼女に約束の夫があるかと聞いた。彼女は笑いながら何の約束もないと答えた。それから、今度は、彼女の方で巳之吉は結婚しているか、あるいは約束があるかと尋ねた。彼は彼女に、養うべき母が一人あるが、お嫁の問題は、まだ自分が若いから、考えに上つた事はないと答えた。……こんな打明け話のあとで、彼等は長い間ものを言わないで歩いた。しかし諺ことわざにある通り「……気があれば眼も口ほどにものを言い」であつた。村に着く頃までに、彼等はお互に大層氣に入つていた。そして、その時巳之吉はしばらく自分の家で休むようにとお雪に言つた。彼女はしばらくはに cand たためらつていたが、彼と共にそこへ行つた。そして彼の母は彼女を歓迎して、彼女のために暖かい食事を用意した。お雪の立居振舞は、そんなによかつたので、巳之吉の母は急に好きになつて、彼女に江戸への旅を延ばすように勧めた。そして自然の成行きとして、お雪は江戸へは遂に行かなかつた。彼女は「お嫁」としてその家にとどまつた。

六、お雪は巳之吉のよき嫁となり男女十人の子供の母ともなる

お雪は大層よい嫁である事が分った。巳之吉の母が死ぬようになった、五年ばかりの後、彼女の最後の言葉は、彼女の嫁に対する愛情と賞賛の言葉であった。そしてお雪は巳之吉に男女十人の子供を生んだ。皆綺麗な子供で色が非常に白かった。

田舎の人々はお雪を、生れつき自分等と違った不思議な人と考えた。大概の農夫の女は早く年を取る。しかしお雪は十人の子供の母となったあとでも、始めて村へ来た日と同じように若くて、みずみずしく見えた。

七、ある晩子供等が寝たあとで巳之吉はあの日のことを語り始める

ある晩子供等が寝たあとで、お雪は行燈の光で針仕事をしていた。そして巳之吉は彼女を見つめながら言った。「……お前がそうして顔にあかりを受けて、針仕事をしているのを見ると、わしが十八の少年の時遇った不思議な事が思い出される。わしはその時、今のお前のように綺麗なそして色白な人を見た。全く、その女はお前にそっくりだったよ」と言うのと、仕事から眼を上げないで、お雪は答えた。「……その人の話をしてちょうだい。……どこでおあいになったの」と聞くのであった。

そこで巳之吉は渡し守の小屋で過ごした恐ろしい夜の事を彼女に話した。そして、ここにこしてささやきながら、自分の上に屈んだ白い女の事、それから、茂作老人の物も言わずに死んだ事。そして彼は言った。「……眠っている時にでも起きている時にでも、お前のように綺麗な人を見たのはその時だけだ。もちろんそれは人間じゃなかった。そしてわしはその女が恐ろしかった。大変恐ろしかった。が、その女は大変白かった。……実際わしが見たのは夢であったかそれとも雪女であったか、分らないでいる」と言うのであった。……

すると、お雪は縫物を投げ捨てて立ち上って巳之吉の坐っている処で、彼の上に屈んで、彼の顔に向って叫んだ。「……それは私、私、私でした。……それは雪（お雪）でした。そしてその時あなたが、その事を一言でも言ったら、私はあなたを殺すと言いました。……そこに眠っている子供等がいなかったら、今すぐあなたを殺すのでした。でも今あなたは子供等を大事になさる方がいい。もし子供等があなたに不平を言うべき理由でもあったら、私はそれ相当にあなたを扱うつもりだから」と言うのであった。

彼女がそう叫んでいる最中、彼女の声は細くなって行った。風の叫びのように。それから彼女は輝いた白い霞となって屋根の棟木の方へ上って、それから煙出しの穴を通ってふるえながら出て行った。……もう再び彼女は見られなかった。(完)

*

*

絡わだかま
(小泉八雲)

目次

小泉八雲の世界

貉^{むじな}

- 一、東京の、赤坂への道に紀国坂きのくにざかという坂道がある
- 二、濠ほりの縁ふちに踞かがんで、ひどく泣いている女に出会う
- 三、蕎麦屋そばの提灯ちようちんのところへと必死に逃げると……

※ 参考文献

一、東京の、赤坂への道に紀国坂という坂道がある

東京の、赤坂への道に紀国坂という坂道がある。これは紀伊の国の坂という意である。何故それが紀伊の国の坂と呼ばれているのか、それは私の知らない事である。この坂の一方の側には昔からの深い極めて広い濠があつて、それに添つて高い緑の堤が高く立ち、その上が庭地になっている。道の他側には皇居の長い宏大な堀が長くつづいている。街灯、人力車の時代以前にあつては、その辺は夜暗くなると非常に寂しかった。ためにおそく通る徒歩者は、日没後に、ひとりこの紀国坂を登るよりは、むしろ幾里も廻り道をしたものである。これは皆、その辺をよく歩いた貉のためである。

二、濠の縁に踞んで、ひどく泣いている女に出会う

貉を見た最後の人は、約三十年前に死んだ京橋方面の年とつた商人であつた。当人の語つた話というのはこうである。――

この商人がある晩おそく紀国坂を急いで登つて行くと、ただひとり濠の縁に踞んで、ひどく泣いている女を見た。身を投げるのではないかと心配して、商人は足をとどめ、自分の力に及ぶだけの助力、もしくは慰藉(慰め)を与えようとした。女は華奢な上品な人らしく、服装も綺麗であつたし、それから髪は良家の若い娘のそのように結ばれていた。

「……お女中」と商人は女に近寄つて声をかけた。「……お女中、そんなにお泣きなされるな!……何が困りなのか、私に仰しゃい。その上でお助けをする道があれば、喜んでお助け申しましょう」(実際、男は自分の言つた通りの事をする積りであつた。何となれば、この人は非常に深切な人であつたから)。しかし女は泣き続けていた。その長い一方の袖を以て商人に顔を隠して、「……お女中」と出来る限りやさしく商人は再び言つた。

「……どうぞ、どうぞ、私の言葉を聴いて下さい! ここは夜若い御婦人などの居るべき場処ではありません! 御頼み申すから、お泣きなされるな! どうしたら少しでも、お助けをする事が出来るのか、それを言つて下さい!」と言つと、徐ろに女は起ち上つたが、商人には背中を向けていた。そしてその袖のうしろで呻き咽びつづけていた。商人はその手を軽く女の肩の上に置いて説き立てた。「……お女中! お女中! お女中! 私の言葉をお聴きなさい。ただちよつとでいいから! お女中! お女中!」と言つと、そのお女中なるものは向きかえつた。そしてその袖を下に落し、手で自分の顔を撫でた。見ると目も鼻も口もない――きやつと声をあげて商人は逃げ出した。

三、蕎麦屋の提灯のところへと必死に逃げると

一目散に紀国坂をかけ登つた。自分の前はすべて真暗で何もない空虚であつた。振り返つてみる勇氣もなくて、ただひた走りに走りつづけた拳句、ようよう遙か遠くに、螢火の光っているように見える提灯を見つけて、その方に向つて行つた。それは道側に屋台

を下^{おろ}していた売り歩く蕎麦屋^{そば}の提灯^{ちようちん}に過ぎない事が解^とった。しかしどんな明かりでも、どんな人間の仲間でも、以上のような事に遇^あった後^{あと}には、結構であった。商人は蕎麦売^{そば}りの足下に身を投げ倒して声をあげた。「……ああ！ ああ！ ああ！」と……。

「……これ！ これ！」と蕎麦屋^{そば}はあらあらしく叫んだ。「……これ、どうしたんだ？ 誰かにやられたのか？」と聞くと、「……否^{いや}、誰れにもやられたのではない」と相手は息を切らしながら言った。「……ただ、ああ！ ああ！」と言うばかりで、「……ただおどかされたのか？」と蕎麦売^{そば}りはすげなく問うた。「……盗賊^{どろぼう}にか？」と聞くと、「……盗賊^{どろぼう}ではない、盗賊^{どろぼう}ではない」とおじけた男は喘ぎながら言った。「……私は見たのだ、女を見たのだ。濠^{ほり}の縁^{えり}で、その女が私に見せたものだ。ああ！ 何を見せたって、そりや言えない」と言うと、「……へえ！ その見せたものはこんなものだったかい？」と蕎麦屋^{そば}は自分の顔を撫^なでながら言った。それと共に、蕎麦売^{そば}りの顔は卵^{たまご}のようになった。そして同時に灯火^{あかり}も消えてしまった。(完)

*

*

葬られたる秘密
(小泉八雲)

目次

小泉八雲の世界

葬られたる秘密

- 一、ある金持ちの商人にお園という一人の娘があつた
- 二、檀寺だんでらに行き、住職に事のいちご一いち仕じゆうを話す
- 三、刻限が過ぎると、お園の姿が不意にたんす箆すのあわ前にあわ踊われた
- 四、それはお園が京都で修業していた時に貰もらった手紙であつた。

※ 参考文献

葬られたる秘密

(小泉八雲)

一、ある金持ちの商人にお園という一人の娘があった

むかし丹波の国に稻村屋源助という金持ちの商人が住んでいた。この人にお園という一人の娘があった。お園は非常に伶俐(れいり)で、また美人であったので、源助は田舎の先生の教育だけで育てる事を遺憾に思い、信用のある従者をつけて娘を京都にやり、都の婦人達の受ける上品な芸事を修業させるようにした。こうして教育を受けた後、お園は父の一族の知人――ながらやという商人に嫁(かたう)けられ、ほとんど四年の間その男と楽しく暮した。二人の仲には一人の子――男の子があった。しかるにお園は結婚後四年目に病気になるり死んでしまった。

その葬式のあつた晩にお園の小さい息子は、お母さんが帰つて来て、二階のお部屋に居たよと言つた。お園は子供を見て微笑んだが、口を利きはしなかつた。それで子供は恐ろしくなつて逃げて来たと言うのであつた。そこで、一家の内の誰れ彼れもお園のであつた二階の部屋に行つてみると、驚いたことには、その部屋にある位牌の前に点された小さい灯明(とうみょう)の光りで、死んだ母なる人の姿が見えたのである。お園は箆(たんす)すなわち抽斗(ひきだし)になっている箱の前に立っているらしく、その箆(たんす)にはまだお園の飾り道具や衣類が入つていたのである。お園の頭と肩とはごく瞭然(はつきり)見えたが、腰から下は姿がだんだん薄くなつて見えなくなつてゐる。あたかもそれが本人の、はつきりしない反影のように、また、水面における影の如く透き通つていた。

それで人々は、恐れを抱き部屋を出てしまい、下で一同集つて相談をしたところ、お園の夫の母の言うには「……女というものは、自分の小間物(こまもの)が好きなものだが、お園も自分のものに執著(しやく)してゐた。たぶん、それを見に戻つたのであろう。死人でそんな事をするものもずいぶんあります――その品物が檀寺(だんでら)にやられずにいると。……お園の著物(きもの)や帯もお寺へ納めれば、たぶん魂も安心するであらう」と言うのであつた。

で、出来る限り早く、この事を果すという事に極められ、翌朝、抽斗(ひきだし)を空(から)にし、お園の飾り道具や衣裳はみな寺に運ばれた。しかしお園はつぎの夜も帰つて来て、前の通り箆(たんす)を見ていた。それからそのつぎの晩も、つぎのつぎの晩も、毎晩帰つて来た――ためにこの家は恐怖の家となつた。

二、檀寺(だんでら)に行き、住職に事の一伍一什(いちじゆう)を話す

お園の夫の母はそこで檀寺(だんでら)に行き、住職に事の一伍一什(いちじゆう)を話し、幽霊の件について相談を求めた。その寺は禅寺であつて、住職は学識のある老人で、大玄和尚(だいげん)として知られていた人であつた。和尚の言うに「……それはその箆(たんす)の内か、またはその近くに、何か女の気にかかるものがあるに相違ない」と言うのと、老婦人は答えた。「……それでも私共(わたくしども)は抽斗(ひきだし)を空(から)にいたしましたので、箆(たんす)にはもう何も御座(ござ)いませんのです」と言うのと、大玄和尚は言つた。「……宜しい、では、今夜拙僧(せつそう)が御宅(ごたく)へ上り、その部屋で番をいたし、どうしたらいいか考えてみるで御座(ござ)らう。どうか、拙僧(せつそう)が呼ばる時の外は、誰れも番を致しておる

部屋に、入らぬよう命じておいていただきたい」と言うのであった。

三、刻限が過ぎると、お園の姿が不意に筆筒の前に頭れた

日没後、大玄和尚はその家へ行くと、部屋は自分のために用意が出来ていた。和尚は御経を読みながら、そこにただ独り坐っていた。が、子の刻過ぎまでは、何も頭れては来なかつた。しかし、その刻限が過ぎると、お園の姿が不意に筆筒の前に、いつとなく輪廓を頭した。その顔は何か気になると言つた様子で、両眼をじつと筆筒に据えていた。

和尚はかかる場合に誦するように定められてある経文を口にして、さてその姿に向つて、お園の戒名を呼んで話しかけた。「……拙僧は貴女のお助けをするために、ここに来たもので御座る。定めしその筆筒の中には、貴女の心配になるのも無理のない何かがあるのであろう。貴女のために私がそれを探し出して差し上げようか」と言うとき、影は少し頭を動かして、「承諾したらしい様子をした。そこで和尚は起ち上り、一番上の抽斗を開けてみた。が、それは空であつた。つづいて和尚は、第二、第三、第四の抽斗を開けた——抽斗の背後や下を気をつけて探した。箱の内部も気をつけて調べてみた、が何もない。しかしお園の姿は前と同じように、気にかかると言つたようにじつと見つめていた。「……どうしてもらいたいと言うのかしら？」と和尚は考えた。が、突然こういう事に気がついた。抽斗の中を張つてある紙の下に何か隠してあるのかもしれない。と、そこで一番目の抽斗の貼り紙をはがしたが——何もない！ 第二、第三の抽斗の貼り紙をはがしたが。それでもまだ何もない。しかるに一番下の抽斗の貼り紙の下に何か見つかった。一通の手紙である。「……貴女の心を悩ましていたものはこれかな？」と和尚は訊ねた。女の影は和尚の方に向つた。その力のない凝視は手紙の上に据えられていた。「……拙僧がそれを焼き棄てて進ぜようか？」と和尚は訊ねた。お園の姿は和尚の前に頭を下げた。「……今朝すぐに寺で焼き棄て、私の外、誰れにもそれを読ませまい」と和尚は約束した。姿は微笑して消えてしまつた。

四、それはお園が京都で修業していた時に貰つた手紙であつた

和尚が梯子段を降りて来た時、夜は明けかけており、一家の人々は心配して下で待つていた。「……御心配なさるな、もう二度と影は頭れぬから」と和尚は一同に向つて言つた。果してお園の影は遂に頭れなかつた。

手紙は焼き棄てられた。それはお園が京都で修業していた時に貰つた艶書（恋文）であつた。しかしその内に書いてあつた事を知っているものは和尚ばかりであつて、秘密は和尚と共に葬られてしまつた。（完）

* * *

耳無芳ほういちの話
(小泉八雲)

目次

小泉八雲の世界

耳無芳一の話

- 一、昔、壇ノ浦で平家と源氏の最後の戦闘が戦われた
- 二、芳一という盲人の琵琶法師がいた
- 三、阿彌陀寺の住職の寺院の一室を与えられる
- 四、夏の夜、一人で居る芳一のところに使いがやって来る
- 五、住職からなぜ私共にことわらずに行つたのだと問われる
- 六、寺を脱け出した芳一の後を下男達あんどが後を跟つけていくと
- 七、住職と納所なつしよは芳一の身体中からだにお経の文句を書きつける
- 八、帰つて来た住職は、急いですぐに裏の縁側の処へ行くと……
- 九、この不思議な話は諸方に広がり、たちまち芳一は有名になった

※ 参考文献

耳無芳一の話

(小泉八雲)

一、昔、壇ノ浦で平家と源氏の最後の戦闘が戦われた

七百年以上も昔の事、下ノ関海峡の壇ノ浦で、平家すなわち平族と、源氏すなわち源族との間の、永い争いの最後の戦闘が戦われた。この壇ノ浦で平家は、その一族の婦人子供ならびにその幼帝——今日安徳天皇として記憶されている。と共に、まったく滅亡した。そうしてその海と浜辺とは七百年間その怨霊に祟られていた。他の個処で私はそこに居る平家蟹という不思議な蟹の事を読者諸君に語った事があるが、それはその背中が人間の顔になっており、平家の武者の魂であると言われているのである。しかしその海岸一帯には、たくさん不思議な事が見聞きされる。闇夜には幾千となき幽霊火が、水うち際にふわわさすらうか、もしくは波の上にはちらちら飛ぶ。すなわち漁夫の呼んで鬼火すなわち魔の火と称する青白い光りである。そして風の立つ時には大きな叫び声が、戦の叫喚のように、海から聞えて来る。

平家の人達は以前は今よりも遙かに焦慮していた。夜、漕ぎ行く船のほとりに立ち頭、それを沈めようとし、また水泳する人をたえず待ち受けていては、それを引きずり返もうとするのである。これ等の死者を慰めるために建立されたのが、すなわち赤間ヶ関の仏教の御寺なる阿彌陀寺であったが、その墓地もまた、それに接して海岸に設けられた。そしてその墓地の内には入水された皇帝と、その歴史の臣下との名を刻みつけた幾箇かの石碑が立てられ、かつそれ等の人々の霊のために、仏教の法会がそこで整然と行われていたのである。この寺が建立され、その墓が出来てから以後、平家の人達は以前よりも禍いをする事が少なくなった。しかしそれでもなお引き続いており、怪しい事をするのではあった。彼等が完き平和を得ていなかった事の証拠として。

二、芳一という盲人の琵琶法師がいた

幾百年か以前の事、この赤間ヶ関に芳一という盲人が住んでいたが、この男は吟誦して、琵琶を奏するに妙を得ているので世に聞えていた。子供の中から吟誦し、かつ弾奏する訓練を受けていたのであるが、まだ少年の頃から、師匠達を凌駕していた。本職の琵琶法師としてこの男は重もに、平家及び源氏の物語を吟誦するので有名になった。そして壇ノ浦の戦の歌を謡うと鬼神すらも涙をとどめ得なかつたという事である。

三、阿彌陀寺の住職の寺院の一室を与えられる

芳一には出世の首途の際、はなはだ貧しかったが、しかし助けてくれる深切な友があった。すなわち阿彌陀寺の住職というのが、詩歌や音楽が好きであったので、たびたび芳一を寺へ招じて弾奏させまた、吟誦したのであった。後になり住職はこの少年の驚くべき技倆にひどく感心して、芳一に寺をば自分の家とするようにと言いつ出したのであるが、芳一は感謝してこの申し出を受納した。それで芳一は寺院の一室を与えられ、食事と宿泊

とに対する返礼として、別に用のない晩には、琵琶を奏して、住職を悦ばすという事だけが注文されていた。

四、夏の夜、一人で居る芳一のとこりに使いがやって来る

ある夏の夜の事、住職は死んだ檀家の家で、仏教の法会を営むように呼ばれたので、芳一だけを残して納所（坊主）を連れて出て行った。それは暑い晩であったので、盲人芳一は涼もうと思つて、寝間の前の縁側に出ていた。この縁側は阿彌陀寺の裏手の小さな庭を見下しているのがあった。芳一は住職の帰来を待ち、琵琶を練習しながら自分の孤独を慰めていた。夜半も過ぎたが、住職は帰つて来なかった。しかし空気はまだなかなか暑くて、戸の内ではくつろぐわけにはいかない。それで芳一は外に居た。やがて、裏門から近よつて来る聲音が聞えた。誰れかが庭を横断して、縁側の処へ進みより、芳一のすぐ前に立ち止った。が、それは住職ではなかった。底力のある声が盲人の名を呼んだ。出し抜けに、無作法に、ちようど、侍が下下を呼びつけるような風に、「芳一！」と。

芳一はあまりに吃驚してしばらくは返事も出なかった。すると、その声は厳しい命令を下すような調子で呼ばわつた。「芳一！」「はい！」と威嚇する声に縮み上つて盲人は返事をした。「……私は盲目で御座います！ どなたが呼びになるのか解りません！」と言うのであつた。

*

*

見知らぬ人は言葉をやわらげて言い出した。「……何も恐わがる事はない。拙者はこの寺の近処に居るもので、お前の許へ用を伝えるように言いつかつて来たものだ。拙者の今の殿様というのは、大した高い身分の方で、今、たくさん立派な供をつれてこの赤間ヶ関に御滞在なされているが、壇ノ浦の戦場を御覧になりたいというので、今日、そこを御見物になったのだ。ところで、お前がその戦争の話を語るのが、上手だという事をお聞きになり、お前のその演奏をお聞きになりたいとの御所望である。であるから、琵琶をもち即刻拙者と一緒に尊い方方の待ち受けておられる家へ来るが宜い」と言うのであつた。

当時、侍の命令と言えば容易に、反くわけにはいかなかった。で、芳一は草履をはき琵琶をもち、知らぬ人と一緒に出て行ったが、その人は巧者（巧み）に芳一を案内して行ったけれども、芳一はよほど急ぎ足で歩かなければならなかった。また手引きをしたその手は鉄のようであつた。武者の足どりのカタカタいう音はやがて、その人がすっかり甲冑を著けている事を示した。定めし何か殿居の衛士でもあろうか、芳一の最初の驚きは去つて、今や自分の幸運を考え始めた。何故かというに、この家来の人の「大した高い身分の人」と言つた事を思い出し、自分の吟誦を聞きたいと所望された殿様は、第一流の大名に外ならぬと考えたからである。やがて侍は立ち止つた。芳一は大きな門口に達したのだと覺つた。ところで、自分は町のその辺には、阿彌陀寺の大門を外にしては、別に大きな門があつたとは思わなかつたので不思議に思つた。「開門！」と侍は呼ばわつた。すると門を抜く音がして、二人は這入つて行った。二人は広い庭を過ぎ再びある入口の前で止つた。そこでこの武士は大きな声で「……これ誰れか内のもの！ 芳一を連れて来た」と叫んだ。すると急いで歩く聲音、襖のあく音、兩戸の開く音、女達の話し声などが聞えて来た。女達の言葉から察して、芳一はそれが高貴な家の召使である事を知つた。しかしどうい

処へ自分は連れられて来たのか見当が付かなかった。が、それをとにかく考えている間もなかつた。手を引かれて幾箇の石段を登ると、その一番最後の段の上で、草履をぬげと言われ、それから女の手に導かれて、拭き込んだ板鋪のはてしない区域を過ぎ、覚え切れないほどたくさん柱の角を廻り、驚くべきほど広い畳を敷いた床を通り——大きな部屋の真中に案内された。そこに大勢の人が集っていたと芳一は思った。絹のすれる音は森の木ノ葉の音のようであった。それからまた何んだかガヤガヤ言っている大勢の事も聞えた。低音で話している。そしてその言葉は宮中の言葉であった。

*

*

芳一は気楽にしているようにと言われ、座蒲団が自分のために備えられているのを知つた。それでその上に座を取って、琵琶の調子を合わせると、女の声が——その女を芳一は老女すなわち女のする用向きを取り締る女中頭だと判じた。——芳一に向つてこう言いかけた。「……ただ今、琵琶に合わせて、平家の物語を語っていただきたいという御所望に御座います」と。さてそれ（平家物語）をすっかり語るのには幾晩もかかる。それ故芳一は進んでこう訊ねた。「……物語の全部は、ちよつとは語られませぬが、どの条下を語れという殿様の御所望で御座いますか？」と聞くと、女の声は答えた。「……壇ノ浦の戦の話をお語りなされ——その一条下が一番哀れの深い処で御座いますから」と。

芳一は声を張り上げ、烈しい海戦の歌をうたつた——琵琶を以て、あるいは橈を引き、船を進める音を出したり、はッしと飛ぶ矢の音、人々の叫ぶ声、足踏みの音、兜にあたる刃の響き、海に陥る打たれたもの音等を、驚くばかりに出さしたりして。その演奏の途切れ途切れに、芳一は自分の左右に、賞讃の囁く声を聞いた。「……何という巧い琵琶師だろう！」「……自分達の田舎ではこんな琵琶を聴いた事がない！」「……国中に芳一のような謡い手はまたとあるまい！」と。するといつそ勇氣が出て来て、芳一はますますうまく弾きかつ謡つた。そして驚きのため周囲は森としてしまった。しかし終りに美人弱者の運命——婦人と子供との哀れな最期——双腕に幼帝を抱き奉つた二位の尼の入水を語つた時には——聴者はことごとく皆一様に、長い長い戦き慄える苦悶の声をあげ、それから後というもの一同は声をあげ、取り乱して哭き悲しんだので、芳一は自分の起こした悲痛の強烈なのに驚かされたくらいであった。しばらくの間はむせび悲しむ声が続いた。しかし、おもむろに哀哭の声は消えて、またそれに続いた非常な静かさの内に、芳一は老女であると考えた女の声を聞いた。

*

*

その女はこう言った。「……私共は貴方が琵琶の名人であつて、また謡う方でも肩を並べるもののない事は聞き及んでいた事では御座いますが、貴方が今晚御聴かせ下さつたようなあんなお腕前をお有ちにならうとは思ひも致しませんでした。殿様には大層御気に召し、貴方に十分な御礼を下さる御考えである由を御伝え申すようにとの事に御座います。が、これから後六日の間毎晩一度ずつ殿様の御前で演奏をお聞きに入れるようとの御意に御座います。その上で殿様にはたぶん御帰りの旅に上られる事と存じます。それ故明晩も同じ時刻に、ここへ御出向きなされませ。今夜、貴方を御案内いたしましたあの家来が、また、御迎えに参るで御座いませう。それから一つ貴方に御伝えするように申しつけられた事が御座います。それは殿様がこの赤間ヶ関に御滞在中、貴方がこの御殿に御上りになる事を誰れにも御話しにならぬようとの御所望に御座います。殿様には御忍びの御旅行ゆえ、

かような事はいっさい口外致さぬようにとの御上意によりますので。……ただ今、御自由に御坊に御帰りあそばせ」と言うのであった。

五、住職からなぜ私共にことわらずに行つたのだと問われる

芳一は感謝の意を十分に述べると、女に手を取られてこの家の入口まで来、そこには前に自分を案内してくれた同じ家来が待っていて、家につれられて行つた。家来は寺の裏の縁側の処まで芳一を連れて来て、そこで別れを告げて行つた。

*

*

芳一の戻つたのはやがて夜明けであつたが、その寺をあけた事には、誰れも気が付かなかつた。住職はよほど遅く帰つて来たので、芳一は寝ているものと思つたのであつた。昼の中芳一は少し休息する事が出来た。そしてその不思議な事件については一言もしなかつた。翌日の夜中に侍がまた芳一を迎えに来て、かの高貴の集りに連れて行つたが、そこで芳一はまた吟誦し、前回の演奏が贏ち得たその同じ成功を博した。しかるにこの二度目の伺候中、芳一の寺をあけている事が偶然に見つけられた。それで朝戻つてから芳一は住職の前に呼びつけられた。住職は言葉やわからかに叱るような調子でこつ言つた。――

「……芳一、私共はお前の身の上を大変心配していたのだ。目が見えないのに、一人で、あんなに遅く出かけては危険（危険）だ。何故、私共にことわらずに行つたのだ。そうすれば下男に供をさしたものに、それからまたどこへ行つていたのかな」と聞くのであつた。芳一は言い遁れるように返事をした。「……和尚様、御免下さいまし！ 少々私用が御座いまして、他の時刻にその事を処置する事が出来ませんでしたので」と……。

住職は芳一が黙っているので、心配したというよりむしろ驚いた。それが不自然な事であり、何かよくない事でもあるのではなからうかと感じたのであつた。住職はこの盲人の少年があるいは悪魔につかれたか、あるいは騙されたのであろうと心配した。で、それ以上何も訊ねなかつたが、ひそかに寺の下男に旨をふくめて、芳一の行動に気をつけており、暗くなつてから、また寺を出て行くような事があつたなら、その後を跟けるようにと言いつけた。

六、寺を脱け出した芳一の後を下男達が後を跟けていくと

すぐその翌晩、芳一の寺を脱け出して行くのを見たので、下男達は直ちに提灯をともし、その後を跟けた。しかるにそれが雨の晩で非常に暗かつたため、寺男が道路へ出ない内に、芳一の姿は消え失せてしまった。まさしく芳一は非常に早足で歩いたので。その盲目な事を考えてみるとそれは不思議な事だ。何故かと言うに道は悪るかつたのであるから。男達は急いで町を通つて行き、芳一がいつも行きつけている家へ行き、訊ねてみたが、誰れも芳一の事を知っているものはなかつた。しまいに、男達は浜辺の方の道から寺へ歸つて来ると、阿彌陀寺の墓地の中に、盛んに琵琶の弾じられて音の音が聞えるので、一同は吃驚した。二つ三つの鬼火――暗い晩に通例そこにちらちら見えるような――の外、それらの方は真暗であつた。しかし、男達はすぐに墓地へと急いで行つた。そして提灯の明かりで、一同はそこに芳一を見つけた。雨の中に、安徳天皇の記念の墓の前に独り坐つて、

琵琶をならし、壇ノ浦の合戦の曲を高く誦して。その背後と周囲と、それから到る処たくさんの墓の上に死者の霊火が蠟燭のように燃えていた。いまだかつて人の目にこれほどの鬼火が見えた事はなかった……。」「……芳一さん！ 芳一さん！」と下男達は声をかけた。「……貴方は何かに魅^{だま}されているのだ！ 芳一さん！」と言うのであった。

しかし盲人には聞えないらしい。力を籠めて芳一は琵琶を錚錚^{そうそう}嘖嘖^{かたかた}と鳴らしていた。ますます烈しく壇ノ浦の合戦の曲を誦した。男達は芳一をつかまえ、耳に口をつけて声をかけた。「……芳一さん！ 芳一さん！、すぐ私達と一緒に家にお帰んなさい！」と、すると、叱るように芳一は男達に向って言った。「……この高貴の方方の前で、そんな風に私の邪魔をするとは容赦はならんぞ」と言う。

事柄の無気味なのに拘らず、これには下男達も笑わずにはいられなかった。芳一が何かに魅^ほかされていたのは確かなので、一同は芳一を捕まえ、その身体をもち上げて起させ、力まかせに急いで寺へつれ帰った。そこで住職の命令で、芳一は濡れた著物を脱ぎ、新しい著物を著せられ、食べものや、飲みものを与えられた。その上で住職は芳一のこの驚くべき行為をぜひ十分に説き明かす事を迫った。

芳一は長い間それを語るに躊躇^{ちゆうちゆう}していた。しかし、遂に自分の行為が実際、深切な住職を脅^{おど}かしかつ怒^{おこ}らした事を知って、自分の緘黙^{かんもく}を破ろうと決心し、最初、侍の来た時以来、あつた事をいっさい物語った。

すると住職は言った。「……可哀そうな男だ。芳一、お前の身は今大変に危ういぞ！ もっと前にお前がこの事をすっかり私に話さなかったのはいかにも不幸な事であった！ お前の音楽の妙技がまったく不思議な難儀にお前を引き込んだのだ。お前は決して人の家を訪れているのではなくて、墓地の中にある平家の墓の前で、夜を過していたのだという事に、今はもう心付かなくてはいけない。今夜、下男達はお前の雨の中に坐っているのを見たが、それは安徳天皇の記念の墓の前であった。お前が想像していた事はみな幻影^{まぼろし}だ。死んだ人の訪れて来た事の外は。で、一度死んだ人の言う事を聴いた上は、身をその為するがままに任したというものだ。もしこれまであつた事の上に、またも、その言う事を聴いたなら、お前は那些人達に八つ裂きにされる事だろう。しかし、いづれにしても早晚^{そうばん}（遅かれ早かれ）お前は殺される。ところで、今夜私はお前と一緒にいるわけにいかぬ。私はまた一つ法会^{ほうえ}をするように呼ばれている。が、行く前にお前の身体を護るために、その身に経文^{きやうもん}を書いて行かなければなるまい」と言うのであった。

七、住職と納所は芳一の身体中にお経の文句を書きつけた

日没前住職と納所（坊主）とで芳一を裸にし、筆を以て二人して芳一の、胸、背、頭、顔、頸、手足——身体中どこと言わず、足の裏にさえも——般若心経^{はんにやしんきやう}というお経の文句を書きつけた。それが済むと、住職は芳一にこう言いつけた。「……今夜、私が出て行つたらすぐに、お前は縁側に坐って、待っていなさい。すると迎えが来る。が、どんな事があっても、返事をしたり、動いてはならぬ。口を利かず静かに坐っていなさい。禅定に入っているようにして。もし動いたり、少しでも声を立てたりすると、お前は切りさいなま

れてしまふ。恐がらず、助けを呼んだりしようと思つてはいかぬ。助けを呼んだところで助かるわけのものではないから。私が言う通りに間違ひなくしておれば、危険は通り過ぎて、もう恐ろしい事はなくなる」と言うのであった。

*

*

日が暮れてから、住職と納所（坊主）とは出て行つた、芳一は言いつけられた通り縁側に座を占めた。自分の傍の板鋪の上に琵琶を置き、入禪の姿勢をとり、じつと静かにしていた。注意して咳もせかず、聞えるようには息もせず。幾時間もこうして待つていた。すると道路の方から跫音のやつて来るのが聞えた。跫音は門を通り過ぎ、庭を横断り、縁側に近寄つて止つた。すぐ芳一の正面に。「……芳一！」と底力のある声がか呼んだ。が盲人は息を凝らして、動かずに坐つていた。「……芳一！」と再び恐ろしい声がか呼ばわつた。ついで三度、兇猛な声で「……芳一」と言うのであった。

芳一は石のように静かにしていた。すると苦情を言うような声で、「……返事がない！これはいかん！ 奴、どこに居るのか見てやらなければやア」と言い、縁側に上る重くらしい跫音がした。足はしつしつと近寄つて、芳一の傍に止つた。それからしばらくの間――その間、芳一は全身が胸の鼓動するにつれて震えるのを感じた。まったく森閑としてしまつた。

遂に自分のすぐ傍であららしい声がか言ひ出した。「……ここに琵琶がある、だが、琵琶師と言つては――ただその耳が二つあるばかりだ！ 道理で返事をしないはずだ。返事をする口がないのだ。両耳の外、琵琶師の身体は何も残つていない。よし殿様へこの耳を持つて行こう。出来る限り殿様の仰せられた通りにした証拠に……」と。

その瞬時に芳一は鉄のような指で両耳を掴まれ、引きちぎられたのを感じた！ 痛さは非常であつたが、それでも声はあげなかつた。重くらしい足踏みは縁側を通つて退いて行き、庭に下り、道路の方へ通つて行き、消えてしまつた。芳一は頭の両側から濃い温いものの滴つて来るのを感じた。が、あえて両手を上げる事もしなかつた……。

八、帰つて来た住職は、急いですぐに裏の縁側の処へ行くと……

日の出前に住職は帰つて来た。急いですぐに裏の縁側の処へ行くと、何んだかねばねばしたものを踏みつけて滑り、そして慄然として声をあげた。それは提灯の光りで、そのねばねばしたものの血であつた事を見たからである。しかし、芳一は入禪の姿勢でそこに坐つて居るのを住職は認めた。傷からはなお血をだらだら流して。「……可哀そうに芳一！」と驚いた住職は声を立てた。「……これはどうした事か……お前、怪我をしたのか」と言うのであった。……

住職の声を聞いて盲人は安心した。芳一は急に泣き出した。そして、涙ながらにその夜の事件を物語つた。「……可哀そうに、可哀そうに芳一！」と住職は叫んだ。「……みな私の手落ちだ！ 酷い私の手落ちだ！ お前の身体中くまなく経文を書いたに、耳だけが残つていた！ そこへ経文を書く事は納所（坊主）に任じたのだ。ところで納所（坊主）が相違なくそれを書いたか、それを確かめておかなかつたのは、じゅうじゅう私が悪るかつた！ いや、どうもそれはもう致し方のない事だ。出来るだけ早く、その傷を治すより仕方がない。芳一、まア喜べ！ 危険は今まったく済んだ。もう二度とあんな来客に煩

わされる事はない」と言うのであった。

九、この不思議な話は諸方に広がり、たちまち芳一は有名になった。

深切な医者のおかげで、芳一の怪我はほどなく治った。この不思議な事件の話は諸方に広がり、たちまち芳一は有名になった。貴い人々が大勢赤間ヶ関に行つて、芳一の吟誦を聞いた。そして芳一は多額の金員を贈り物に貰つた。それで芳一は金持ちになった。しかしこの事件のあつた時から、この男は耳無芳一という呼び名ばかりで知られていた。(完)

*

*

幽霊滝の伝説
(小泉八雲)

目次

小泉八雲の世界

幽霊滝の伝説

- 一、伯耆^{ほうぎ}の国の黒坂村^{くろさか}の近くに、幽霊滝という名の滝があった
- 二、麻取場^{あさ}で働く女性^{たち}達が仕事後に「怪談」話に興じていた
- 三、幽霊滝に一人で行き、賽銭箱^{さいせんだん}を持ち帰ってくると……

※ 参考文献

幽霊滝の伝説

(小泉八雲)

一、伯耆の国の黒坂村の近くに、幽霊滝という名の滝があった

伯耆の国(鳥取県西部)の黒坂村の近くに、一条の滝がある。幽霊滝というその名の由来を私は知らない。滝の側に滝大明神という氏神の小さい社があつて、社の前に小さい賽銭箱がある。その賽銭箱について物語がある。

二、麻取場で働く女性達の仕事後に「怪談」話に興じていた

今より三十五年前、ある冬の寒い晩、黒坂の麻取場に使われている娘や女房達(たち)が一日の仕事を終ったあとで炉のまわりに集つて、怪談に興じていた。はなしが十余りも出た頃には大概のものはなんだか薄気味悪くなつていた。その時その気味悪さの快感を一層高めるつもりで、一人の娘が、「……今夜あの幽霊滝へひとりで行つて見たらどうでしょう」と言い出した。この思いつきを聞いて一同は思わずわつと叫んだが、また続いて神経的にどつと笑い出した。……そのうちの一人は嘲る(あざむ)ように、「……私は今夜取つた麻をその人に皆上げる」と言った。「……私も上げる」、「……私も」と言う人が続いて出て来た。四番目の人は「皆賛成」と言い切つた。……その時安本お勝(かつ)という大工の女房が立ち上つた。——この人は二つになる一人息子を暖かそうに包んで、背中に寝かせていた。「……皆さん、本当に皆さんが今日取つた麻を皆私に下さるなら、私幽霊滝に行きます」と言った。その申出は驚きと侮りとを以て迎えられた。しかし、度々くりかえされたので一同本気になつた。麻取りの人達は、もしお勝が幽霊滝に行くようならその日の分の麻を上げると、銘々くりかえして言った。「……でもお勝さんが本当にそこへ行くかどうか、どうして分ります」と鋭い声で言つたものがあつた。一人のお婆さんが「……さあ、それなら賽銭箱をもつて来てもらいましょう。それが何よりの証拠になります」と答えた。お勝は「……もつて来ます」と言つた。それから眠つたこどもを背負つたままで戸外へ飛び出した。

三、幽霊滝に一人で行き、賽銭箱を持ち帰つてくると……

その夜は寒かつたが、晴れていた。人通りのない往来をお勝は急いだ。身を切るような寒さのために往来の戸はかたく閉ざしてあつた。村を離れて、淋しい道を——ピチャピチャ——走つた。左右は静かな一面に氷つた田、道を照らすものは星ばかり。三十分程その道をたどつてから、崖の下へ曲り下つて行く狭い道へ折れた。進むに随つて路は益々悪く益々暗くなつたが、彼女はよく知つていた。やがて滝の鈍いうなりが聞えて来た。もう少し行くと路は広い谷になつて、そこで鈍いうなりが急に高い叫びになつてゐる。そうして彼女の前の一面の暗黒のうちに、滝が長く、ぼんやり光つて見える。かすかに社と、それから、賽銭箱が見える。彼女は走り寄つて、——それに手をかけた。……

「おい、お勝」と不意に、とどろく水の上で警戒の声がした。お勝は恐怖のためにしびれて——立ちすくんだ。「おい、お勝」と再びその声は響いた。——今度はその音調はも

つと威嚇的であった。

しかしお勝は元来大胆な女であった。直ちに我にかえって、賽銭箱を引っさらって駆け出した。往来へ出るまでは、彼女を恐がらせるものをそれ以上何も見も聞きもしなかった。そこまで来て足を止めてほっと一息ついた。それから休まず——ピチャピチャ——駆け出して、黒坂村について麻取場の戸をばげしくたたいた。

息をきらして、賽銭箱をもってお勝が入って来た時、女房や娘達はどんなに叫んだらう。彼等は息をとめて話を聞いた。幽霊滝から二度まで名を呼んだ何者かの声の話をした時に彼等は同情の叫びをあげた。……何という女だらう。剛胆なお勝さん。……麻を皆上げるだけの直打は充分にある。……「……でもお勝さん、さぞ赤ちゃんは寒かったでしょう」とお婆さんは言った。「……もつと火の側へつれて来ましょう」と言うと、「……おなか
が空いたらうね」と母親は言った。「……すぐお乳を上げますよ」、「……かわいそうにお勝さん」、お婆さんはこどもを包んであるはんでんを解く手伝をしながら言った。「……おや、背中がすっかりぬれていますよ」と、それからこの助手はしゃがれ声で叫んだ。「……アラッ、血が」と言うのであった。

解いたはんでんの中から床に落ちたものは、血にしみたこどもの着物で、そこから出てくるものは、二本の大層小さな足とそれから二本の大層小さな手——ただそれだけで——こどもの頭はもぎ取られていた。……(完)

*

*

忠五郎のはなし
(小泉八雲)

目次

小泉八雲の世界

忠五郎のはなし

- 一、足軽の忠五郎は毎夜出かけて朝方帰って来るのであった
- 二、足軽の忠五郎をまど惑わしていた彼女とはいったい何者なのか

※ 参考文献

忠五郎のはなし

(小泉八雲)

一、足輕の忠五郎は毎夜出かけて朝方帰って来るのであった

昔、江戸小石川に鈴木という旗本があつて、屋敷は江戸川の岸、中の橋に近い所にあつた。この鈴木の家来に忠五郎という足輕がいた。容貌の立派な、大層愛想のいい、伶俐(れいり)利発(りぱつ)な若者で、同僚の受けも甚(はな)だよかつた。

忠五郎は鈴木に仕えてから数年になるが、何等(なんら)非難(ひなん)の打ち所のない程(ほど)身持もよかつた。しかし遂(すなは)に外の足輕は、忠五郎が毎夜、庭から抜け出して明方(あけがた)少し前までいつもうちにいない事を発見した。初めは、この妙な挙動(きやうどう)に対して誰も何にも言わなかつた。その外出のために日常の務めに故障(こわう)を来す事がなかつたのと、またそれは何かの恋愛事件であるらしかつたからであつた。しかし暫(しば)らくして、彼は蒼白(そうはく)く衰(おとろ)えて来たので、同僚は何か重大な間違でも起らぬように、干渉(かんじやう)する事にした。そこである晩忠五郎が丁度(ちやうど)家を抜け出すとする時、一人の年取つた侍(さむらい)が彼をわきへ呼んで言つた。

「……忠五郎殿、御身(おんみ)が毎晩、出かけて、明方(あけがた)までうちに居(お)られない事は、我々(みづか)皆知(み)つてゐる。それから見たところ顔色もよくない。どうも御身(おんみ)は悪友(あくゆう)と交(ま)つて健康を害(がい)してゐるのではないか。その行(おこない)に相当(おと)の弁解(べんげ)ができないとこの事を役頭(やくがしら)まで届けて出なければならぬ。何れにしても我々(みづか)は御身(おんみ)の同僚(どうりやう)でまた友人(ゆうじん)であるから、御身(おんみ)がこの家の掟(おきて)に反(か)して夜分外出(よぶんしゅつ)なざる理由(りゆう)を承(う)るのが正當(せいとう)じゃ」と言うのであつた。

そう言われて忠五郎は大層(おほ)当惑(たうわく)し、また驚愕(きやうがく)したらしかつた。暫(しば)くは黙(もく)つていたが、やがて、彼は庭に出た。同僚(どうりやう)もそのあとに續(つ)いて出た。二人(ふたり)が外(ぐわい)の人に聞(き)かれない所(ところ)まで来たとき忠五郎は止(と)つて言(い)つた。「……もう一切(いっけい)申(ま)します。しかしどうか内密(ないみつ)にしておいて下さい。もし私の言(い)う事を洩(も)されると、一大不幸(いちだふしん)が私の身(み)にふりかかります」と言う。

*

*

「……五ヶ月程(ごげつりやう)前の事です。私(わたし)がこの恋(こひ)のために始めて夜外出(よるしゅつ)しましたのは。ことしの春(はる)の初(はつ)めの事(こと)でした。ある晩(ばん)私は、両親(りやうしん)を訪(たづ)ねて屋敷(やしき)へ帰(かへ)ろうとする途中(ちゆうちゆう)、表門(ひょうもん)から遠(とほ)くない川岸(かわぎし)に婦人(ふじん)が一人立(ひとりた)つてゐるのを見(み)ました。みなりは上流(じやうりゆう)の人のようでした。それで私はそんな立派(りつぱ)な装(ま)いの婦人(ふじん)がこんな時刻(じこく)に一人そこに立(た)つてゐるのが変(か)だと思(おも)いました。しかし私はそんな事をその婦人(ふじん)に尋(たず)ねる理由(りゆう)はないと思(おも)いましたので、何も言(い)わずにわきを通(とほ)ろうと致(いた)します」と、その婦人(ふじん)は前(まへ)へ出(で)て私の袖(そで)を引(ひ)きました。見(み)ると大層(おほ)若(わか)い綺麗な人(ひと)でした。「……あの橋(はし)まで私(わたし)と一緒に歩(あ)いて下さいませんか、あなたに申(ま)上げる事(こと)があります」と女(おんな)は言(い)いました。その声(こゑ)は大層(おほ)柔(な)かな気(き)もちのよい声(こゑ)でした。それから物(もの)を言(い)う時(とき)、にっこりしました。そのにっこりには勝(か)てませんでした。そこで私も一緒に橋(はし)の方(かた)へ歩(あ)きました。その途中(ちゆうちゆう)女(おんな)は私(わたし)が屋敷(やしき)へ出入(でいりしゅつ)するのをこれまで度々(たびたび)見ていて好きになつたと言(い)います。「……私はあなたを夫(つま)に持(も)ちたい。あなたは私(わたし)が嫌(きら)いでなければお互(たがひ)に幸福(きふ)になれます」と言(い)いました。何(なに)と答(こた)えてよいか分(わ)らなかつたが、大層(おほ)綺麗な女(おんな)だと思(おも)いました。橋(はし)に近(ちか)づく女(おんな)はまた私の袖(そで)を引(ひ)いて堤(つみ)を下(くだ)りて川の丁度(ちやうど)ふちまで連れて行(い)きました。「……一緒にいらつしやい」とそうささやいて川(か)の方(かた)へ私(わたし)を引きました。御承知(ごしやうち)の通りあそこは深(ふか)い所(ところ)です。それで俄(にわか)に女(おんな)がこわくなつて引きかえそうと致(いた)しまし

た。女はにっこりして私の手頸を握って「……私と一緒にならこわくはありません」と言いました。

*

*

どうしたわけか、その女の手にはさわられると私は赤ん坊よりも意気地がなくなりました。夢の中で走ろうとしても手も足も動かさない時のような気が致しました。女は深い水の中へ踏み込んで、一緒に私を引き込みました。それから何も見えも聞えも感じもしなかったが、気がついてみると大層明るい大きな御殿らしい所を女とならんで歩いていました。濡れてもいなければ寒くもありません。周囲のものは一切乾いて暖く綺麗でした。私はどこへどうして来たのだから分りません。女は私の手を引きながら案内して部屋から部屋へと通りぬけて行きました。——その部屋の数の多い事は限りがない程で、それがみな空でした。しかし非常に立派でした。——最後に千畳敷の客間に参りました。向うの床の間の前に灯がともっていて、宴会のように座布団が並べてあったが、客は見えない。女は私を床の間の上座に案内して、自分はその前に坐っていました。「……これが私の家です。ここで私と幸福に暮らされると思いませんか」とこう尋ねながらにっこりしました。私はこのにっこりが全世界の何よりも綺麗だと思いました。それで心から「ええ……」と答えました。同時に私は浦島の話を思い出して、これは神女かも知れないと思いましたが、こわくて何も聞かれませんでした。……やがて女中達が入って来て、酒肴を私共の前に置きました。それから私の前に坐った女は、「……私がおいやではないなら、今晚婚礼の式を挙げましょう。これが結婚の御馳走です」と言いました。七生までの誓をして、宴会の後、用意の部屋へ案内されました。

*

*

私を起してくれたのは朝まだ早い頃でした。その時、女は「……あなたはもう私の夫です。しかし今私から言われたい、あなたも聞いてはならない理由があって、この結婚を秘密にしておく事が必要です。夜明まであなたをここに置いては二人とも生命が危くなりますよ。それで御願ですから、御主人の屋敷へあなたを送りかえしても機嫌を悪くしないで下さい。今夜また、それから、これからも毎晩、始めてお遇いしたあの時刻にお出でになって下さい。いつでも橋のわきで私を待っていて下さい。長くはお待たせしませんから、しかし何よりもよく覚えていて下さい。この結婚は秘密ですよ。それからもしこの事を人に話したら、もう永久に別れなければならなくなりますよ」と言うのであった。

*

*

私は何事も女の言う通りにする約束をしました。——浦島の運命を思い出しながら、それから女は誰もいない綺麗な部屋を沢山通りぬけて、入口まで私を案内しました。そこで私の手頸を取ると、また一切のものが不意に暗くなって覚えがなくなったが、気が付くと中の橋の近くの川岸に独りで立っていました。屋敷へ帰りましたが、まだ寺の鐘が鳴り出しませんでした。

「……夕方女の言った時刻にまた橋のところへ参りますと女が待っていました。前のように私を深い水の中へ、それから婚礼の晩をすごした不思議な所へ連れて行きました。それから毎晩、同じ様にその女と会っては別れました。今晚も必ず私を待っています。女に失望させるよりは一層死にたいのですから私は行かねばなりません。……しかし御願です、私が今申し上げた事は誰にも決して言わないで下さい」と言うのであった。

二、足輕の忠五郎を惑わしていた彼女とはいったい何者なのか

年寄の足輕はこの話を聞いて驚きかつ恐れた。忠五郎は偽いつわりのない白状をしていると感じたが、その白状は不快な事を色々思わせた。あるいはこの経験は迷いかも知れない。禍心わざを有ゆうせる魔の力が起させる迷いかも知れない。しかしもし本当に魅まされていいるのなら、この若者は叱るよりむしろ憐あわれむべきものであった。それで無理に干渉がましき事をすれば却かえって害になると老人は思った。そこで足輕はやさしく答えた。「……誰にも決して言わない。——少くとも君が達者で生きていいうちは、それでは行ってその女に会い給え。しかし——用心し給え。君は何か悪いものに魅たまされてはいはしないかと心配しているんだ」と言うのであった。

忠五郎は老人の忠告を聞いて微笑して、急いで去った。数時間の後、妙に落胆した様子をして屋敷へ帰った。「……会ったかね」と老同僚はささやいた。「いいえ」と忠五郎は答えた。「……いませんでした。始めてそこにいませんでした。もう再び私には会いません。あなたにお話したのは私の誤りでした。——約束を破ったのはこの上もない愚おろかな事でした……」と。相手を慰なぐさめようとしたが駄目であった。忠五郎は倒れて、もう物を言わない。悪寒のように、彼は頭から足までふるい出した。

暁あかつきを知らせる寺の鐘かねが鳴り出した時、忠五郎は起き上ろうとしたが、生気もなく倒れた。たしかに病氣——助からぬ病氣になった。漢方医が招かれた。「……はて、この人には血がない」とその医師は丁寧に診察してから言った。「……この人の脈管みやくかんには水ばかりしかない。これはむつかしい病人だ。……まあ、なんと因業な事だろう」と言うのであった。

忠五郎の生命を助けるためにできるだけの事はなされた。——しかし駄目であった。日暮に彼は死んだ。それから彼の老同僚はその初めからの話をした。「……ああ、私もそれを疑ってみる処であった」と医者は叫んだ。「……どんな力もそれなら助けることはできない。その女に生命を取られたのはこの人が始めてではない」と言う。すると、「……誰ですか、その女は、——それとも何ですか、その女と言うのは」と足輕は尋ねた。「……狐きつねですか」、「……いいや、昔からこの川に出ているのです。若い人の血が好きなのです……」と言う。「……蛇ですか、——龍ですか」と聞くと、「……いや、いや、君が昼、あの橋の下で見たら実にいやな動物に見えるでしょうが」と言うので、「……と言うと、どんな動物なんでしょう」と聞くので、「……ただの墓がまさ、——大きな醜い墓がまさ」と言うのであった。(完)

*

*

おしどり
(小泉八雲)

おしどり

(小泉八雲)

陸奥の国、田村の郷の住人、村允そんじょうという鷹使たかでありかつ獵師りょうしである男がいた。ある日獵に出たが鳥を得ないで空しく帰った。その途中赤沼という所でおしどりが一つがい泳いでいるのを見た。おしどりを殺すのは感心しないが、飢えていたので、村允はその一つがいを目がけて矢を放った。矢は雄鳥を貫いた。雌鳥は向うの岸の蘆あしの中に逃げて見えなくなった。村允は鳥の屍しかばねを家に持ち帰ってそれを料理した。

*
その晩村允そんじょうはものすごい夢を見た。美しい女が部屋に入って来て、枕元まくらもとに立って泣き出すような夢であった。余りはげしく泣くので聴いていると胸が裂けるようであった。女は叫んだ。「……何故ああ何故夫を殺しました。殺されるような、どんな罪を犯しましたか。赤沼で私共は楽しく暮らしていたのです。——それにあなたは夫を殺しました。……あなたに一体、何の害をしたのでしょうか。自分で何をしたか、あなたは分っていますか。——ああ、どんな残酷な、どんな悪い事をしたか、分っていますか。……あなたは私も殺しました。——夫がいないでは私は生きている気はない。……私はただこの事を言いに来ました」。……それから又、大声で泣き出した。余りはげしく泣いたので、その泣き声が村允の骨の髄までしみ渡った。それからつぎの歌を、泣き泣きよんだ。——

日暮るれば 誘さそひしものを、あかぬまの

真菰まこも(草) 隠かくれの 独り寝ひとりねぞ憂うれき

*
この歌の文句を吐き出したあとで、彼女は叫んだ。「……ああ、あなたは知らない——何をしたか分る訳はない。しかし明日赤沼へ行けば分ります——分ります……」と、そう言って又悲しそうに泣いて帰った。

朝、目がさめた時、この夢が心にはつきり残っていたので村允そんじょうは甚だ困った。「……しかし明日赤沼へ行けば分ります——分ります」という言葉は、彼にとつて忘れられなかった。そこで彼は、その夢は、夢以上のものであるか、どうかをたしかめるために、直ちにそこへ行こうと決心した。

*
そこで彼は赤沼へ行った。岸についた時、見ると雌鳥めすがひとり泳いでいた。同時にその鳥が村允そんじょうを認めた。しかし逃げようとしなくて不思議な風に、わき目もふらずに村允を見つめながら、真直まっすぐにその方に向って泳いで来た。それからくちばしで、不意に自分の体をつき破って村允の目の前で死んだ。……

村允そんじょうは頭を剃って、僧そうとなった。(完)

*

*

常識
(小泉八雲)

目次

小泉八雲の世界

常識

- 一、京都に近い愛宕山あたごに黙想もくそうと読経どきょうに余念のない高僧こうそうがあつた
- 二、真夜中に普賢菩薩ふげんぼさつが白象しろぞうに乗つてその姿すがたを顕あらわすのを待っていた
- 三、博学の僧は容易たやすに騙だまされたが無学むがくな狐師こしは強い常識じょうしきをもっていた

※ 参考文献

一、京都に近い愛宕山に黙想と読経に余念のない高僧があった

昔、京都に近い愛宕山に、黙想と読経に余念のない高僧があった。住んでいた小さい寺は、どの村からも遠く離れていた。そんな淋しい処では誰かの世話がなくては日常の生活にも不自由するばかりであったろうが、信心深い田舎の人々が代る代るきまつて毎月米や野菜を持ってきて、この高僧の生活をささえてくれた。

この善男善女のうちに獵師が一人いた。この男はこの山へ獲物をあさりにも度々来た。ある日のこと、この獵師がお寺へ一袋の米を持って来た時、僧は言った。

「……一つお前に話したい事がある。この前会ってから、ここで不思議な事がある。どうして愚僧のようなものの眼前に、こんな事が現れるのか分らない。しかし、お前の知つての通り、愚僧は年来毎日読経黙想をしているので、今度授かった事は、その行いの功德かとも思われるが、それもたしかではない。しかし、たしかに毎晩、普賢菩薩が白象に乗つてこの寺へお見えになる。……今夜愚僧と一緒に、ここにおいて御覧、その仏様を拝む事ができる」と言うので、「……そんな尊い仏が拝めるとはどれほど有難いことか分りません。喜んで御一緒に拝みます」と獵師は答えるのであった。

そこで獵師は寺にとどまった。しかし僧が勤行にいそしんでいる間に、獵師はこれから実現されようという奇蹟について考え出した。それからこんな事あり得べきかどうかについて疑い出した。考えるにつれて、疑は増すばかりであった。寺に小僧がいた。――そこで獵師は小僧に折を見て聞いた。

「……聖人のお話では普賢菩薩は毎晩この寺へお見えになるそうだが、あなたも拝んだのですか」と獵師は聞いた。「……はい、もう六度、私は恭しく普賢菩薩を拝みました」と小僧は答えた。獵師は小僧の言を少しも疑わなかったが、この答によつて疑は一層増すばかりであった。小僧は一体何を見たのであろうか。それも今に分るであろう。こう思い直して約束の出現の時を熱心に待っていた。

二、真夜中に普賢菩薩が白象に乗つてその姿を顯すのを待っていた

真夜中少し前に、僧は普賢菩薩の見えさせ給う用意の時なる事を知らせた。小さいお寺の戸はあけ放たれた。僧は顔を東の方に向けて入口に跪いた。小僧はその左に跪いた。獵師は恭しく僧のうしろに席を取つた。

九月二十日の夜であった。――淋しい、暗い、それから風の烈しい夜であった。三人は長い間普賢菩薩の出現の時を待っていた。ようやくのこと東の方に、星のような一点の白い光が見えた。それからこの光は素早く近づいて来た。――段々大きくなって来て、山の斜面を残らず照した。やがてその光はある姿――六本の牙のある雪白の象に乗つた聖い菩薩の姿となった。そうして光り輝ける乗手をのせた象は直ぐお寺の前に着いた。月光の山のように、不可思議にも、ものすごくも、高く聳えてそこに立った。

その時僧と小僧は平伏して異常の熱心をもって普賢菩薩への読経を始めた。ところが

不意に獵師は二人の背後に立ち上り、手に弓を取って満月の如く引きしぼり、光明の菩薩に向つて長い矢をひゅつと射た。すると矢は菩薩の胸に深く、羽根のところまでもつきささった。

突然、落雷のような音響とともに白い光は消えて、菩薩の姿も見えなくなった。お寺の前はただ暗い風があるだけであった。「……情けない男だ」と僧は悔恨絶望の涙とともに叫んだ。「……何というお前は極悪非道の人だ。お前は何をしたのだ——何をしてくれただのだ」と言うのであった。

しかし獵師は僧の非難を聞いても何等後悔憤怒の色を表わさなかつた。それから甚だ穩かに言った。「……聖人様、どうか落ちついて、私の言う事を聞いて下さい。あなたは年来の修業と読經の功德によって、普賢菩薩を拜む事ができるのでお考えになりました。それなら仏様は私やこの小僧には見えず、聖人様にだけお見えになる筈だと考えます。私は無学な獵師で、私の職業は殺生です。——ものの生命を取る事は、仏様はお嫌いです。それでどうして普賢菩薩が拜めましょう。仏様は四方八方どこにでもおいでになる。ただ凡夫は愚痴蒙昧のために拜む事ができないと聞いております。聖人様は、淨い生活をしておられる高僧でいらせられるから、仏を拜めるようなさとりを開かれましょう。しかし生計のために生物を殺すようなものは、どうして仏様を拜む力など得られましょう。それに私もこの小僧も二人とも聖人様の御覧になったとおりのものを見ました。それで聖人様に申し上げますが、御覧になったものは普賢菩薩ではなくてあなたをだまして——事によれば、あなたを殺そうとする何か化物に相違ありません。どうか夜の明けるまで我慢して下さい。そうしたら私のいう事の間違でない証拠を御覧に入れましょう」と言うのであった。

日出とともに獵師と僧は、その姿の立っていた処を調べて、うすい血の跡を発見した。それからその跡をたどつて数百歩離れたうつろ（空洞）に着いた。そこで、獵師の矢に貫かれた大きな狸の死体を見た。

三、博学の僧は容易に騙されたが無学な獵師は強い常識をもっていた

博学にして信心深い人であったが僧は狸に容易にだまされていた。しかし獵師は無学無信心ではあったが、強い常識を生れながらもっていた。この生れながらもっていた常識だけで直ちに危険な迷を看破し、かつそれを退治する事ができた。(未完)

*

*

術数
(小泉八雲)

目次

小泉八雲の世界

術数

- 一、屋敷の庭で死刑執行がきまりその罪人は庭に引き出された
- 二、家来達は死者の復讐を恐れて施餓鬼を行なう事を願い出た

※ 参考文献

術数

(小泉八雲)

一、屋敷の庭で死刑執行がきまりその罪人は庭に引き出された

屋敷の庭で死刑が執行される事にきまった。その罪人は引き出された。今も読者が日本庭園で見られるような飛石の一行が真中にある、砂を敷いた広場へ坐らされた。彼は後ろ手に縛られていた。家来は手桶の水と小石の満ちた俵を運んだ。それから坐っている男のまわりに俵をつめた。――動けないようにくさびどめにしておいた。主人が来て、その準備を見た。満足らしく、何も言わなかった。

不意に罪人は彼に呼びかけた。「……お侍様、今から御仕置を受ける事になったが、私の過は、なにも知って犯したんじゃないやございません。その過の元は只私が馬鹿だったからです。何かの因果で愚鈍に生れて来たのでいつも間違をせずには居られない。だがなにも愚鈍に生れついたって言うわけで、人を殺すのはそりゃひどい。そんな無法は胸晴しをせずには居られない。どうでも私を殺すと言うなら、きつと私は復讐する。あなたが恨みを懐かせるから、復讐になる。つまり仇に報ゆるに、仇をもつてするんだ……」と言うのであった。

人がはげしい恨みを呑みながら殺されると、その人の幽霊は殺した人に恨みを報ゆる事ができる。この事を侍は知っていた。彼は甚だ穩かに――殆んど愛撫するように――答えた。「……お前が死んだあとで、自分等をおどかすことはお前の勝手だが、お前の言おうと思っっていることは分りにくい。お前の恨みの何か証拠を――首が切れたあとで――自分等に見せてくれないか」と言うと、「……見せるともきつと」と男は答えた。

「……宣しい」と侍が長い刀をぬいて言った。「……これからお前の首を切る。丁度前に飛石がある。首が切れたら、一つその飛石をかんで見せないか。お前の怒った魂がそれをやれるなら、自分等のうちにもこわがるものもあるだろう。……その石をかんで見せないか」と言うと、「かまずにおくものか」と大變に怒ってその男は叫んだ。「……かむとも。かむ」と言うのであった。

刃は閃いた。風を斬る音、首が落ちて、からだの崩れる音がした。縛られたからだは、俵の上へ弓なりになった。――二つの長い血の噴出しが、切られた首から勢よく迸っている。それから首は砂の上にくわがった。飛石の方へ重苦しうにころがった。それから不意に飛び上って、飛石の上端を齒の間に押えてしばらく、必死となつてかじりつき、それから力弱ってポタリと落ちた。

*

*

物を言うものではなく、家来達はただ恐ろしそうに主人を見つめていた。主人は全く無頓着のようであった。彼は只すく側に居る家来に刀をさし出した。その家来は柄杓で柄から切先まで水をそいで、それから丁寧に柔かな数枚の紙で幾度かそのはがねをふいた。……そしてこの事件の儀式的部分は終った。

二、家来達は死者の復讐を恐れて施餓鬼を行なう事を願ひ出た

その後数ヶ月間、家来達と下部等はたえず、幽霊の来訪を恐れていた。誰もその約束の復讐の来る事を疑うものがなかった。そのたえざる恐れのために、ありもしないものを多く、聞いたり見たりするようになった。竹の間の風の音をも恐れた。庭で動く影にも恐れた。遂に相談の結果、その恨みを呑んでいる霊のために、施餓鬼（死者の霊に飲食物を供えて経を読む供養）を行うように主人に願う事にきめた。

家来の総代が一同の願を言った時に、「全く無用」と侍が言った。「……あの男が死ぬ時に復讐を誓ったのが、つまり恐れの原因であろうと思う。しかし、この場合恐れる事は何もない」と言うのであった。

その家来は頼むように主人を見たが、この驚くべき自信の理由を問う事をためらった。

「……ああ、その理由は極めて簡単だ」と、その言葉に表われない疑を推しはかつて侍が言った。「……彼の最後のまろみだけが、ただ、危険になれたのだ。そして自分が彼にその証拠を見せるといふんだ時、復讐の念から彼の心をわきへ向けた。つまり飛石にかじりつきたい一念で死んだのだ。その目的を果す事ができたが、ただ、それっきり。あとはすっかり忘れてしまったに違いない。……だからお前達はそんな事にもう、かれこれ心配しないでもいい」と言うのであった。——そして実際、死人は何も崇るところがなかった。全く何事も起らなかった。（完）

*

*

雉子のはなし
(小泉八雲)

目次

小泉八雲の世界

雉子のはなし

- 一、ある夜妻は死んだ 舅しゅうとの助けて欲しいという夢を見る
- 二、家に帰ってきた夫に妻は米櫃びつに隠した雉子きじの話をする
- 三、妻は夫の雉子きじを殺した行為の一切を地頭に訴え出た

※ 参考文献

雉子のはなし

(小泉八雲)

一、ある夜妻は死んだ 舅の助けて欲しいという夢を見る

昔、尾州遠山の里に若い農夫とその妻が住んでいた。家は山の間の淋しい場所にあった。ある夜妻は夢を見た。その夢に数年前になくなった 舅が来て、「……明日自分は非常に危険な目に遇うから、できるなら助けてくれ」と言った。朝になってこの事を夫に話した。二人とも、死んだ人が何か用があるのだろうとは思ったが、その夢の言葉は何の意味が分らなかった。

朝飯の後、夫は畠へ行つたが妻は機織のために家に残った。やがて外の方で大きな騒ぎが聞えたので驚いて出てみると、地頭が大勢の伴をつれて狩猟のためにこの辺へ近づいて来た。見ているうちに一羽の雉子がわきの方から家の中へ飛び込んだ。そこで不図昨夜の夢を想い出した。「……事によればこれが舅かもしれない。助けて上げねばならない」と、彼女は独りで思案した。それから鳥のあとから急いで家に入って、その鳥は綺麗な雄鳥であった。——造作なくそれを捕えて、空の米櫃の中に入れて蓋をしておいた。

しばらくして地頭の従者が幾人か入って来て、雉子を見なかったかと尋ねた。大胆にも彼女は否定したが、猟人の一人はその家へ鳥の飛び込むのをたしかに見たと言った。それから一行は家の中をあらちらとさがしたが、米櫃の中には気付かなかった。そのあたりくまなく搜索したが結局無駄であったので、鳥はどこか穴からでも逃げたに相違ないとあきらめて人々は引き上げた。

二、家に帰ってきた夫に妻は米櫃に隠した雉子の話をする

農夫が家に帰った時、妻は夫に見せるために米櫃に隠しておいた雉子の話をした。「……私が捕えた時すこしも抵抗しなかったが、米櫃の中でもおとなしくしています。きつと舅様だと思えます」と妻は言った。農夫は米櫃の処へ行つて、蓋を取つて鳥を取出した。鳥は農夫の手に静にとまつて、そこに居ることに慣れてるように農夫を見ていた。一方の目が盲目であった。「……父の目は一方盲目であった」と農夫が言った。「……右の眼であった——この鳥の右の眼が盲目だ。全くこれは父だろう。丁度いつもの父のような眼付で、この鳥が見ている。……父は自分で「……おれは今、鳥だから、猟師などにやるのなら一層おれの体は子供に喰わしてやる方がましだ」と考えたに相違ない。……それで、お前の昨夜の夢の訳も分つた」と気味の悪いうす笑をうかべて妻の方に向つてこう言い足しながら雉子の頸をねじた。

この野蛮な行を見て、妻は泣き声を上げて叫んだ。「……まあ、この極悪非道の鬼。鬼のような心の人間でなければ、こんな事のできる筈はない。……こんな男の妻になつてゐるより死んだ方が増しだ」と言うのであった。

それから草履もはずして戸外に飛び出した。男は女の飛び出した時に袖をつかんだ。が女は振切つて駆け出した。駆けながら泣いた。はだしで走り続けた。町に着いて、すぐ地頭の屋形へ急いだ。それから涙とともに、猟の前夜の夢の事、雉子を助けたさの余り隠し

た事、それから夫が自分を嘲あざわらつて、とうとうその雉子きじを殺した事の一切を地頭じとうに話した。――地頭じとうは女にやさしい言葉をかけた。そしてこの女を労いたわってやるように命じた。しかし夫は捕とらえるように部下に命じた。

三、妻は夫の雉子きじを殺した行為の一切を地頭じとうに訴え出た

翌日農夫は取調べを受けた。雉子きじを殺した事に就いて、事実を白状させられてから宣告を受けた。地頭じとうは言った。「……余程の悪人でなければ、その方の行ったような事はやれない。そんな邪悪な人間の居おる事は、その土地に取って不幸である。ここに住んで、この掟おきてを守る人々は皆、親孝行の心がけを敬うやまう人々である。その方の如きものをその中に置く事まかりならぬ」と言うのであった。

そこで農夫は、その土地から追放ときまって、もし帰って来たら、死刑に処せられる事になった。しかし女には、地頭じとうは土地を与えた。それから後になってよい夫を持たせた。

(完)

*

*

おかめのはなし
(小泉八雲)

目次

小泉八雲の世界

おかめのはなし

- 一、妻（おかめ）は二十二、その夫（八右衛門）は二十五であった
- 二、おかめの死後、夫（八右衛門）の健康は急激に衰え始める
- 三、その衰弱の理由を母に熱心に懇願されて終に話してしまふ
- 四、母は直ちに檀那寺へ急いで寺僧に一切を話して助力を乞うた

※ 参考文献

おかめのはなし

(小泉八雲)

一、妻(おかめ)は二十二、その夫(八右衛門)は二十五であった

土佐の国名越の長者権右衛門の娘おかめは、その夫八右衛門を非常に好いていた。女は二十二、八右衛門は二十五であった。余り夫を愛するので、世間の人は嫉妬の深い女だろ
うと思った。しかし男は嫉妬されるような原因を作った事もなかった。それで二人の間には
いやな言葉一つ交された事もなかった。

不幸にしておかめは病身であった。結婚後二年にもならないうちに当時土佐に流行して
いた病気にかかって、どんな良医も匙を投げるようになった。この病気にかかる人は、喰
べる事も飲む事もできない。ただ疲れてうとうとして、変な夢に悩まされているだけであ
った。おかめは不断の看護を受けながら、毎日次第に弱って行って、とうとう自分でも助
からぬ事が分って来た。

そこで彼女は夫を呼んで言った。「……私のこのいやな病氣中あなたがどんなに親切に
して下さいたか口では言えません。こんなによくして下さいる方はどこにだつてありません。
私、あなたと別れるのが本当に辛い。……考えて下さい、私まだ二十五にもなりません。
その上私の夫ほどよい人はこの世にはありません。それでも私は死んで行かねばならない。
……いいえ、駄目、駄目、氣休めをおっしゃっても駄目ですよ。どんなお医者だつてどう
にもならないのですもの。もう二三ヶ月生きていたいと思いましたが、今朝鏡を見たら、
今日のうちに死んで行かねばならぬ事が分りました。そう、丁度今日です。それであなた
にお願があります。私が安心して死んで行けるように思つて下さるようなら、その願
を私にかなえさせて下さい」と言うのであった。

そこで「……一寸言つて御覧、何だか」と八右衛門は答えた。「……私の力でできる事
なら、どんな事でも喜んで上げて上げると言つて、……それが——あなたのちつとも喜
ばない事なんです」と彼女は答えた。「……まだ若いのですもの、こんな事をお願するこ
とは、中々——大変——むづかしい事ですわ。でもその願事は私の胸に燃えてる火のよ
うです。死ぬ前に言わせて下さい。どうぞ。……ね——あなた、私が死んだら早晩、皆で
あなたに奥様を持たせるでしょう。ね、あの、約束して下さいませんか。もう二度と結
婚はしないと、おいやですか……」と言うのであった。

「……何だ、そんな事か」と八右衛門は叫んだ。「……願事というのはそれだけの事な
のか、それは何でもない。よし、約束した。お前の代りは決して貰わない」と言つて、「……
……ああ、嬉しい」とおかめは床から半分起きて叫んだ。
それからうしろへ倒れて、同時に彼女の息は絶えた。

二、おかめの死後、夫(八右衛門)の健康は急激に衰え始める

おかめが死んでから、八右衛門の健康は衰えて来るようであった。初めはその様子の変わりようを、人々は人情の悲しみの故と解釈していた。それで村人達は「……どんなにあの奥様が気に入っていたのだろうな」とばかり噂していた。しかし月が重なるにつれて、段々蒼白くなり弱くなりして、遂には人間ではなく幽霊ではないかと思われる程瘦せやつれて来た。それで人々はそんなに若い人がこう急に衰えるのは悲しみだけでは説明ができないと疑い出した。医者達の説では、八右衛門の病氣は普通のものではない。様子は何とも解し難いが、何か心の異常のなやみから起っているらしいという事であった。両親は色々尋ねてみたが駄目であった。彼のいう処では、両親の知っている以外には、何等悲歎の原因はないとの事であった。両親は再婚をすすめた。しかし死人に対する約束はどうしても破る事はできないと言い張った。

三、その衰弱の理由を母に熱心に懇願されて終に話してしまふ

それからあと、八右衛門はやはり日増しに衰えた。家族の人々はその生命を危んだ。ところがある日の事、かねて何か心に隠している事を信じていた母が、熱心にその衰弱の理由を言ってくれるように烈しく泣いて頼んだ、母の懇願には勝たれなくなった。

「……こんな事はあなたにもまたごなたにも全く言にくい事です。すっかり申上げて見た処で本当にはできませんまい。実はおかめはあの世で成仏ができませんのです。それからいくら仏事を行うてやりましても駄目のようです。私も一緒にその冥土の旅に出てやらないとどうしても成仏ができません。おかめは毎晩帰つて来て、私のわきにねます。葬式の日から毎晩、来ない晩はありません。それで時々本当に死んだのではあるまいと思ふ事があります。様子や行いは生きていた時と全く同じですから。ただ私に話をする時、小さい声で物を言うだけです。それから、いつでも、自分の来る事を誰にも言わないようにと申します。私にも死んでもらいたいのでしょう。私も自分だけなら生きていたくはありません。しかし、全く仰せの通り私のからだは両親のもので、両親に先ず第一に孝行しなければなりません。それで、本当の事を皆申し上げるのです。……はい、毎晩丁度眠りかけると参ります。それから明方までいます。鐘が聞えると出て行きます」と言う。

四、母は直ちに檀那寺へ急いで寺僧に一切を話して助力を乞うた

八右衛門の母がこれを聞いてびっくりした。直ちに檀那寺へ急いで寺僧に息子の告白の一切を話して助力を乞うた。高齢で、経験の積んだ寺僧はその話を聞いて驚く色もなく、彼女に言った。「……こう言うことは時々あるものです。始めてではありません。それで御子息も助けて上げられると思います。しかし今大層危い処です。愚僧の見る処では、お顔に死相が現れています。おかめさんがもう一度帰つて来れば、もうそれきりです。それで即刻やるべき事をやらねばなりません。御子息に黙っていて下さい。大急ぎで双方の親戚を集めて、寺へ来るように言つて下さい。御子息のためにおかめさんの墓を開けねばなりません」と言うのであった。

そこで、親戚はお寺に集つた。墓を開く事を一同承諾したので、僧は一同を墓地へ案内した。そこで、その指図に随つておかめの墓石はわきへやられ、墓は開かれ、棺は上げ

られた。棺ひつぎの蓋ふたが取られた時、居合わせた人は胆きもを寒くした。それはおかめは病気の前と同じく綺麗きれいに、顔かほに微笑びしょうを浮べて一同の前に坐すわって、彼女には何等死なんらのあととはなかったから。しかし、僧ひつぎは棺の中から、死人を取り出す事を人々に命じた時、驚きは恐怖となつた。それは長い間正坐の形を取っていたにも拘かかわらず、その死体は触さわわると生きているように暖かく、しなやかであつたから。

それを葬場そうじょうへ運んで、僧は筆を取って額ひたいと胸と手足に何か聖きよい功德のある梵字ぼんじを書いた。それからその屍しかばねをもとの場所へ葬ほうむる前に、おかめのために施餓鬼せがき（死者の靈に飲食物を供そなへて経きやうを読む供養）を行うのであつた。……

彼女は再び夫の処ところへ来なかつた。八右衛門やえもんは次第に健康と力を回復した。しかし彼はいつまでもその約束を守つたかどうか、それは日本の作者は書いていない。（完）

蠅はえのはなし
(小泉八雲)

目次

小泉八雲の世界

蠅はえのはなし

- 一、京都に飾屋かざりや九兵衛という商人の下女げじよに若狭生れの玉わかさというのがいた
- 二、下女げじよの玉は急に病気になり、やがて死んでしまうのであった
- 三、玉の死後十日後、非常に大きな蠅はえが一匹その家へと入って来る
- 四、夫婦は早速、お寺へ行って、その娘の金を寺僧じそうに納めることにした

※ 参考文献

蠅のはなし

(小泉八雲)

一、京都に飾屋九兵衛という商人の下女に若狭生れの玉というのがいた

二百年ばかり前に、京都に飾屋九兵衛という商人が居た。店は島原道の少し南の、寺町通という町にあつた。下女に——若狭の国生れの——玉というのが居た。

玉は九兵衛夫婦に親切に待遇されていて、誠に二人を好んでいるように見えていた。が、玉は他の女の子のように綺麗な著物を著ようとはしないで、休暇を貰うと、美しい著物を数敷貫つていながら、いつも仕事著を著て出るのであつた。五年ばかり九兵衛に奉公してからのこと、ある日九兵衛は、どうして身綺麗にしようと骨を折らぬのかと彼女に訊ねた。

玉はその問いにこもっている非難に顔を赧らめて、恭しくこう答えた。「……私の双親が死にました時は、私はまだ小さな子供でありました。ところが他に子供がありませんでしたから、二人のために法要を営むことが、私の義務になりました。その時分にはそのする程のお金を拵えることが出来ませんでした。しかしそれに入用な金が儲けられたなら、早速二人の位牌を、常楽寺というお寺へ置いてもらい、また法要を営んで貰おうと決心しました。それでその決心を果たすために、お金と著物とを節約しようと力めました。自分の身のことを構わぬと、お氣付きになる程でありますから、余り節約し過ぎているのかもしれない。しかし、お話し申し上げました目的のために、銀百匁ばかりの貯蓄がもう出来ましたから、この後はあなた様のお前へ身綺麗にして出るように致しましょう。これまでの懈怠と失礼とを、どうか御免下さいませますようお願い致します」と言うのであつた。

九兵衛はこの率直な自白に感心したので、その女に親切な言葉をかけて、その後、どんな著物を著ようと、自分の勝手だと思つてよいからと受合ひ、且つまた、その親孝行を賞めてやつた。

二、下女の玉は急に病氣になり、やがて死んでしまうのであつた

二人のこの会話があつてから間も無く、下女の玉は、その双親の位牌を常楽寺に置いてもらひ、また相当な法要を営んで貰うことが出来た。貯えた金のうち、斯して七十匁費やした。そして残り三十匁を、主人の妻に預つておいて下さいと頼んだ。

ところが、翌冬の初めに玉は急に病氣になった。そして暫時、煩つた挙句、元禄十五年(一七〇二年)正月の十一日に死んだ。九兵衛と妻とはその死を大いに悲しんだ。

三、玉の死後十日後、非常に大きな蠅が一匹その家へと入つて来る

さて、それから十日ばかり後、非常に大きな蠅が一匹その家へ入つて来て、九兵衛の頭の廻りを飛び始めた。どんな蠅も、大寒中には大抵は出て来るものではないし、大きい蠅は暖かい季節でなければ滅多に目に当らぬものだから、九兵衛はこれに驚いた。その蠅があまりしつこく九兵衛を悩ますので、わざわざ捉えてそれを戸外へ放り出した。その間少

しもその蠅を痛めぬようにして。それは九兵衛は仏教の篤信者であったからである。直ぐ蠅は戻つて来た。そしてまた捉えられてまた投げ出された。が、また入つて来た。九兵衛の妻はこれを奇異な事に思った。「……玉じゃないかしら」と言った。「死んだ者——殊に餓鬼の境涯へ入る者——は時々、虫の姿になつて戻つて来るから」。九兵衛は笑つて答えた。「……目印をつけたら分るだろう」。そこで、その蠅を捉えて、極く少しばかり翅の両端を鋏で切つて、そうして、家から余程離れた処へ持つて行つて放した。

翌日歸つて来た。それが歸つて来たことに、何等靈的な意義があるかどうか、九兵衛はなお疑つていた。またもそれを捉えて、その翅と軀とに紅を塗り、前よりもずつと家から遠い処へ持つて行つて放した。ところが二日経つと、全身真紅の儘で戻つて来た。そこで九兵衛は疑わなくなつた。

「……玉だと思ふ」と彼は言った。「……何か欲しいものがあるのだ。何が欲しいのだろうか」と言うと、その妻が答えて言うに、「……私は玉の貯蓄の三十匁をまだ有つています。自分の魂のために供養を営むように、その金をお寺へ納めてもらいたいのではありません。玉はいつも後生を気づかつていましたから」というのであつた。

そう話しているうちに、その蠅が、そのとまつていた障子から下へ落ちた。九兵衛が拾い上げてみたら、死んでおつた。

四、夫婦は早速、お寺へ行つて、その娘の金を寺僧に納めることにした

そこで夫婦は早速、お寺へ行つて、その娘の金を寺僧に納めようと決心した。二人はその蠅の屍骸を小箱に入れて、それも携えて行つた。

お寺の主僧自空上人は、その蠅の話の間かれると、九兵衛夫妻は正しい取計をしたと明言された。それから自空上人は、玉の魂のために施餓鬼(死者の靈に飲食物を供えて経を読み供養する)が営まれ、蠅の遺骸に対して、妙典八巻が誦された。そして蠅の遺骸の入っている箱は、お寺の境内へ埋められて、適当な銘の書いてある卒塔婆(お墓の後ろに立てる縦長の木の板のこと)が一基、その上へ建てられた。(完)

死靈
(小泉八雲)

目次

小泉八雲の世界

死霊

- 一、主人の死後その下役したやくの者どもは主人の遺族をだまそうとした
- 二、家の女中は物に取り憑つかれた様になって主人の声で話し始める
- 三、代官に死後の名誉と遺族に大きな賜物たまものが与えられた

※ 参考文献

死霊

(小泉八雲)

一、主人の死後その下役の者どもは主人の遺族をだまそうとした

越前の国の代官、野本彌治衛門の歿した時、その下役の者共相謀つて、その故主人の遺族をだまそうとした。代官の負債の幾分を償却するという口実の下に、その家の財宝家具全部を押えた。その上、故主人が無法にも自分の資産の価値以上の債務を契約したように見える偽りの報告書を整えた。この偽りの報告を彼等は宰相に送った、そこで宰相は越前の国から野本の妻子の追放命令を出した。その頃、代官の家族は、たとえ当主の死後でも、何かその人に非行があったときまれば、幾分責任を負わされたものであった。

二、家の女中は物に取り憑かれた様になって主人の声で話し始める

しかし、その追放命令が野本の未亡人に正式に交付された時、その家の女中に不思議な事が起った。何かものに取りつかれたようにひきつけて、身ぶるいをしだした。ひきつけが終った時、すつくと立ち上つて宰相の役人達と故主人の下役とに叫び出した。

「……さあ、おれの言う事をよく承れ。汝等に話しているのは女でない、おれは彌治衛門——あの世から帰った野本彌治衛門——だ。おれが浅ましくも信じていた者共から招いた悲しさと腹立しさ、その悲しさと腹立たしさの余り帰って来たのだ。……汝等恩知らずの不都合な下役のもの共、どうして汝等はこれまで受けた恩を忘れて、この通りおれの財産をなくし、このおれの名を辱しめるような事ができるのだ。さあここでおれの面前で、役所とおれの家の会計の取調べをしてみせる。家来を一人目附の処へ帳簿を取りにやれ、その取調べを照し合せてみせる」と言うのであった。

女中がこんな言葉を口走った時、居合せたものは一同驚いてしまった、彼女の声や態度は、野本彌治衛門の声や態度であったから。疵もつ足の下役共は青くなつた。しかし宰相の代表者は直ちにその女の願は充分かなえさすべき旨を命じた。役所の会計帳簿は直ちに彼女の前に置かれた。——それから目附の帳簿は運ばれた。そこで彼女は計算を始めた。一つの誤算もなく、彼女は凡ての計算をして総計を書いて、誤りの項目を直した。彼女の書体は正しく野本彌治衛門の書体であると見られた。

さて計算の再検査ができ上つた時、女は正しく野本彌治衛門の声で言った。「……さあこれで一切でき上つた。もうこれ以上おれは何もできない。それでおれはおれの来た処へ帰る」と言うのであった。

それから横になつてすぐに寝込んだ。死人のように二日二晩眠つた。「取りついている魂がぬけると、とりつかれた人に大きな疲労と深い眠りが来る」。再び彼女が起きた時、彼女の声や態度は若い女の声や態度であった。そうしてその時もその後如何なる時も、野本彌治衛門の亡霊にとりつかれていて間のでき事を思い出す事ができなかった。

三、代官に死後の名誉と遺族に大きな賜物が与えられた

この事件の報告は直ちに宰相に送られた。その結果宰相は追放の命令を取消したばかりでなく、代官の遺族に大きな賜物たまものを与えた。その後種々の死後の名譽が、野本彌治やじえもん衛門に与えられた。その上、その後長く家は政府の恩顧おんこを受けて甚だ栄えた。しかし下役したやくの者どもは相当の罰を受けた。(完)

*

*

生いきりよう
靈
(小泉八雲)

目次

小泉八雲の世界

生霊いきりょう

- 一、金持ちの瀬戸物店の喜兵衛きべいは六兵衛むつべいという番頭ばんとうを長く使っていた
- 二、六兵衛むつべいの甥おいは商売しょうばいを益々盛んさかにするが生霊いきりょうに取り憑よかれて病気に…
- 三、外の町まちに六兵衛むつべいとその甥おいの二人の支店しでんを持たせることになる

※ 参考文献

一、金持ちの瀬戸物店の喜兵衛は六兵衛という番頭を長く使っていた

昔、江戸霊岸島れいがんじまに喜兵衛きべいという金持ちの瀬戸物店があった。喜兵衛は六兵衛という番頭を長く使っていた。六兵衛の力で店は繁昌した。余り盛大になって来たので、番頭独りでは管理して行かなくなつた。そこで、経験のある手代てだいを雇う事を願つて許された。それから自分の甥おいを一人よびよせた。以前大阪で瀬戸物商売を習つた事のある、二十二ばかりの若者であつた。

この甥おいは甚はなはだ役に立つ助け役であつた。商売にかけては経験のある叔父おじよりも伶俐れいり(利発)であつた。彼の才発はその家の商売を益々盛んにしたので、喜兵衛は大変喜んだ。しかし雇やとわれてから七月程ほどして、この若者はひどく病氣になつて、助かりそうには思われなくなつた。江戸中の名医も幾人か呼んで診て貰もらつたが、誰にもその病氣の性質は分らない。誰も薬の処方をするものはない。何か人知れぬ悲しみからこの病氣が起つているとしか思われなかつた。一同の意見であつた。

六兵衛は恋の病やまいかとも思つてみた。そこで甥おいに言つた。「……お前はまだ大層若いのだから、誰か人知れず思つている女でもあつて、それでつまらなく思つて、あるいは病氣になる程になつていのではないかとわしは考へているのだが。もしそれが本当ならお前の心配事は皆このわしに言うのが当り前。ここではお前は両親から遠く離れているから、わしはお前のためには父親同様、だから何か心配事や悲しい事があれば、わしは何でも父親のしなげりやならないような事はお前のためにする覚悟だ。もしお金が要るのならいくらでもわしに言いなさい。恥かしかる事はない。わしにはお前の世話はできると思う。それに喜兵衛きべいさんもきつと、お前を元氣に達者にするためなら、どんな事でも喜んでして下さいと、わしは信じている」と言うのであつた。

病人の若者はこんなに親切に言われて困つたらしかつた。それで暫しばらく黙つていた。が遂に答えた。「……こんなに有難いお言葉は、私は決してこの世で忘れる事はできません。しかし私は内々思つている女もありません。どんな女も望んではおりません。私のこの病氣はお医者で直る病氣じゃありません。金は少しも役に立ちません。実は私はこの家で迫害を受けていますので、生きていたとは思わない程です。どこでも——昼でも夜でも、店にいても、自分の部屋にいても、独りの時でも、人中でも、私はたえずある女のまぼろしにつきままとわれて悩まされています。一晚の休息も得られなくなつてから余程になります。眼を閉じるとすぐにその女のまぼろしが私ののどをつかんでしめつけようと致しますから、それで私は少しも眠られませんが……」と言うのであつた。

「……何故またその事をもつと早くわしに言わなかつたのじゃ」と六兵衛は尋ねた。「……言つても駄目だと思つたからです」と甥おいは答えた。「……そのまぼろしは死人の幽霊じやございませぬ。生きている人——あなたのよく御存じの人——の憎しみからでたものなんです」と言うので、「誰だい」と六兵衛は非常に驚いてききただした。すると、「……この家の女主人、喜兵衛きべい様の内儀ないぎ様です。……あの人は私を殺してしまいたいです」と若者はささやいた。

二、六兵衛の甥は商売を益々盛んにするが生霊に取り憑かれて病気に…

六兵衛はこの告白を聞いて当惑した。彼は甥の言った事を少しも疑わなかった。しかしその生霊の起つて来る理由の見当がつかなかった。生霊は失恋または烈しい憎悪から――その生霊の発生する本人も知らないのに、起る事もある。この場合に、何かそこに恋愛関係を想像する事は不可能であった。喜兵衛の妻は、五十をもう余程出ている。しかしまた一方から見て、その若者は憎悪を受けるような――生霊を招く程憎悪を受けるような事を何かしたのであろうか。彼は難の打ち処のない程行儀よく、欠点を見出せぬ程礼儀正しく、それから義務に対して熱心忠実であった。この難問題は六兵衛を困らせた。しかしよくよく考えたあとで一切の事を喜兵衛に打明けて、調べて貰う事に決心した。

喜兵衛は肝をつぶした。しかし四十年の間、六兵衛の言葉を疑うべき理由は少しでもあったためしはなかった。それで直に妻を呼んで、病人の言った事を同時に告げ、用心深く妻に尋ねた。初めのうちは青くなつて泣いていたが、すこしためらつてから、明らかに答えた。「……その新しい手代が言った生霊の事はどうも本当だと思ひます。実は私は言葉や様子に決して表すまいと、本当に努めています。私はどうしてもあれを嫌わずにはいられません。御存じの通りあれは商売が大層上手です。やる事は何でも大層気が利いています。それであなたはあれに大した権限――丁稚や召使に対する権力をこの家で与えておやりになっています。ところがこの商売を相続すべき私達のひとり息子は実にお人よしで、すぐに人にだまされます。それでこの利口な新しい手代が息子をごまかして、この財産を皆横取ってしまうかも知れないと長い間考へていました。全くあの手代は何時でも、造作なく、また何のぼろも出さないので、この商売を潰して、息子を破産させる事ができると私は信じます。そう信じているものですから、あの男を恐れ憎まずにはいられません。死んでくれればよいと何度も思ひました。自分の力で殺せるものならとさえ思ひました。……それは、そんな風に人を憎むのは悪いとは知りながら、その気持を押える事ができませんでした。夜も昼も、あの手代を呪つていたのです。それで六兵衛に言った通りのものが見えたに相違ありません」と言うのであった。

三、外の町に六兵衛とその甥の二人の支店を持たせることになる

「……なんという馬鹿な事だ、そんなに自分で苦しむのは」と喜兵衛は叫んだ。「……今日まであの手代は悪く思われるような事は、何一つした事はない。それにお前はあの男を残酷にも苦しめていた。……ところで、もし外の町で支店を持たせて叔父と二人やる事にしたなら、お前はもつとやさしく考へてやる事ができるだろうね」と聞くと、「……顔を見たり、声を聞いたりしなければ」と妻が答えた。「……もしあなたがあれをこの家から只外へやってさえ下されば、そうすれば憎しみを押える事ができましょう」と言うのと、「……：：：そうしなさい」と喜兵衛は言った。「……これまでのように憎んでいたのでは、あの男はきつと死ぬ。そうするとお前は恩こそあれ何の仇もない人を殺すような大罪を犯した事になる。どの点から見てもあの男はこの上もない立派な手代だ」と言うのであった。

それから直ちに喜兵衛は外の町に支店を設ける準備をした。それからこの手代と共に六

兵衛をやつて監督させた。その後生靈いきりようは若者なやまを悩なやまさなくなつた。若者はやがて健康を回復した。(完)

*

*

お貞さだのはなし
(小泉八雲)

目次

小泉八雲の世界

お貞さだのはなし

- 一、長尾長生ちようせいという人は、小さい時からお貞さだという婚約者がいた
- 二、長尾は結婚するが、やがて両親も妻も一人児こもなくしてしまう
- 三、旅の温泉宿で出会った若い女性の給仕がお貞さだそっくりであった

※ 参考文献

お貞のはなし

一 (小泉八雲)

一、長尾長生という人は、小さい時からお貞という婚約者がいた

昔、越後国新潟の町に長尾長生という人があった。

長尾は医者の子であった。それで父の業をつぐべき教育をうけた。小さい時に父の友人の娘お貞というのと婚約ができていた。長尾の修行の終り次第婚礼をあげる事に両家とも一致していた。しかしお貞の健康のすぐれない事が分つて来た。それから、十五年にお貞は、不治の肺病にかかった。死ぬことが分つた時、彼女は、わかれを告げるために長尾に来てもらった。

長尾が彼女の床のわきに坐ると、彼女は言った。「……長尾さま、私達は子供の時からお互にきまつていました。そして今年の末に結婚する筈でした。しかし今私は死にかかっています。これも神仏の思召です。もう何年か生きていましたら私は他人の迷惑や心配の種子になるばかりでしょうから。こんな弱いからだではよい妻になれるわけはありません。ですからあなたのために生きていたいと願う事さえ余程我ままな願いでしよう。私全くあきらめています。それであなたも悲しまない事を約束して下さい。……それに私達は、又あえると思います。それをあなたに言いたいです」……

*

*

「……本当だ、又あえるとも」と長尾は熱心に答えた。「……そしてあの浄土では別れるという苦痛はないのだから」と言うと、「いいえ、いいえ」と彼女は静かに答えた。「……浄土での事ではありません。明日葬られますけれども——この世で再びあう事にきまつていると信じています」と言うのであった。

長尾は不思議そうに彼女を見た。彼の不思議そうにしているのを見て、微笑している彼女を見た。彼女はおだやかな夢のような声で続けた。「……そうです。この世のつもりです——あなたのこの今の世です。長尾さま、……全くあなたもおいやでなければ、……ただそうなるために私も一度子供に生れかわつて女に成人せねばなりません。それまで、あなたは待つていて下さるでしょう。十五年、十六年、長い事ですね、……しかし私の約束の夫のあなたは今やつと十九です……」と言うのであった。

彼女の臨終を慰めようと思うばかりに、彼はやさしく答えた。「……私の約束の妻、あなたを待つている事は義務であり又嬉しい事です。私共は七生の間お互に誓つてあるのです」、「……あなたはそれを疑いますか」と彼女は彼の顔を見つめながら尋ねた。「……他人のからだになつて、他人の名になつているあなたが分るかどうか疑われます。何か、しるしか証拠を私に言ってくれなければ」と彼は答えた。「……それはできません」と彼女は言った。「……どこでどうしてあうか神仏だけが御存じです。しかしきっと本当にきつと、もしあなたがおいやでなければ私はあなたの処へかえつて来る事ができます。……それだけ覚えていて下さい」と言い、彼女はものを言わなくなった。それから眼を閉じた。彼女は死んでいた。

二、長尾は結婚するが、やがて両親も妻も一人兎もなくしてしまふ

長尾は心からお貞さだになついていた。それだけに彼の悲しみは深かった。彼はお貞さだの俗名を書いた位牌を造らせた。そしてその位牌を仏壇に置いて、毎日その前に供物くもつを捧げた。彼はお貞さだが丁度死ぬ前に言った不思議な事について色々考えた。そして彼女の魂を慰めようと思つて、もし彼女が他人の体でかえつてくる事があつたら、彼女と結婚しようという真面目な約束を書いた。この書附かきつけにした約定やくじように彼の印を捺し、それを封じて仏壇にあるお貞さだの位牌のわきに置いた。

しかし長尾は一人息子であつたから、結婚する事が必要であつた。彼は家族の願ねがひに余儀なく従つて、父の選んだ妻を迎えねばならなくなつた。結婚してからも続いて、お貞さだの位牌の前に供物くもつを捧げた。そしていつも情け深く彼女を覚えていた。しかし彼女の姿は、彼の記憶から次第にうすくなつて行つた。——思い出し難い夢のように、そして歲月はすぎ去つた。

その歲月の間に多くの不幸が彼の身の上にかつた。両親がなくなつた。それから彼の妻と一人児こがなくなつた。それで彼はこの世界に只一人となつた。彼は淋しい家を捨てて悲しみを忘れるために長い旅に上つた。

三、旅の温泉宿で出合つた若い女性の給仕がお貞さだそっくりであつた

旅の間に、ある日、温泉とその周囲の美しい風景とのために、今も名高い山の村、伊香保についた。彼の泊つた村の宿で、一人の若い女が彼の給仕に出た。彼女の顔を始めて見て、未だかつて覚えな程ほどの胸のとどろきを覚えた。それ程不思議にも彼女はお貞さだにそっくりなので、彼は夢でないかと、自分をつめて見た程であつた。彼女が火やお膳を運んだり部屋をかたづけたりして、行つたり来たりする時、彼女の立居振舞は彼が若い時の約束の少女の貴とうとき記憶を彼に起させた。彼は彼女に話しかけた。彼女は柔やわらかなはつきりした声で答えた、その声の美しさは、ありし日の悲しさで、彼を悲しくさせた。

それで彼は甚はなはだ不思議に思つて、こう彼女に問うた。「……ねいさん、あなたは昔、私の知つていた人にあまりによく似ているので、あなたがこの部屋へ始めてはいつて来た時、びっくりしましたよ。それで失礼だが、あなたの郷里と名前をきかして下さい」と。

直ちに——亡くなつた人の忘れられない声で——彼女は答えた。「……私の名はお貞さだです。そしてあなたは私の許嫁いいなづけの夫、越後の長尾長生ちちうせいさんです。十七年前、私は新潟で死にました。それからあなたは、もし私が女のからだをしてこの世にかえつて来れば、私と結婚するという約束を書附かきつけになさいました。そしてあなたはその書附かきつけに判を捺して封をして、仏壇の私の名のある位牌いはいのわきに納おさめました。それで私帰つて参りましたの」と、彼女は最後の言葉を発した時、知覚を失つた。

長尾は彼女と結婚した。そしてその結婚は幸福であつた。しかしその後どんな時にも彼女が伊香保で彼の問に対する答に於て、何を言つたか思い出せない。なお彼女の前世については何も覚えていない。その面会の刹那せつなに不思議に燃え上つた——前世の記憶は、再び

暗くなって、そしてそれから^{のち}後そのままになった。
*
*
(完)

橋の上で
(小泉八雲)

目次

小泉八雲の世界

橋の上で

- 一、熊本の町の白川に架る橋の上で車夫の平七に停まるように言った
- 二、二三年前の橋の上で実際に起こったことを車夫の平七は語り始める
- 三、欄干にいた百姓姿の三人は、密かに馬に乗った士官を狙っていた
- 四、あなたが目撃した、橋の上で殺された人たちは誰ですか？

※ 参考文献

橋の上で

(小泉八雲)

一、熊本の町の白川に架る橋の上で車夫の平七に停まるように言った

お抱え車夫の平七が、熊本の町の近郊にある有名なお寺へ連れて行ってくれた。白川に架っている、弓のように反った、由緒ありそうな橋まで来たとき、私は平七に橋の上で停まるように言った。この辺りの景色をしばし眺めたいと思ったのである。夏空の下で、電気のような白日の光に溢れんばかりに浸されて、大地の色彩は、ほとんどこの世のものとは思われないほど美しく輝いていた。足下には、浅い川が灰色の石の河床の上を、さざめきながら、また音を立てて流れていて、さまざま濃淡の新緑の影を映していた。眼前には、赤茶けた白い道が、小さな森や村落を縫うように曲がりくねり、ときに見えなくなったり、また現れたりしながら、その遙か向こう、広大な肥後平野を取り囲んでいる、高く青い峰々へと続いているのだった。背後には、熊本の町がひかえている。たくさんの屋根の藁が、遠くで青味がかって渾然とした色合いを見せていた。ただ一つ、遠くの森の岡の縁を背にして、お城の灰色の美しい輪郭がくつきりと見えていた……。町の中から見れば、熊本の町はつまらないところだ。けれども、あの夏の日に私が眺めたときのように遠望すれば、そこは霽と夢で出来たおとぎの国の都である……。

二、二三年前の橋の上で実際に起こったことを車夫の平七は語り始める

「……二三年前でしたか」と平七は、額の汗を拭きながら話しました。「……いや、二三年前でしたらう。わしはこの橋の上に立って、町が燃えるのを見とったです」「……夜にですか？」と私は聞きました。「……いいえ、雨の降る日の、昼過ぎでしたな。……戦の真つ最中で、熊本の町は炎に包まれとったですよ」と、老車夫は言った。

「……どこどこが戦っていたのですか？」「……お城の中の鎮台兵と薩摩の軍勢ですよ。大砲の砲弾を避けようと、わしらは地面に穴を掘って、その中にしゃがんどった。薩摩は丘の上に大砲を据えて、お城の鎮台兵はわしらの頭越しに、敵目がけて打込んでおった。町は全部焼けてしまうた」「……でも、どうしてここにいたのですか？」と聞くと、「……逃げてきたとですよ。ひとりで、やっとこの橋まで逃げてきました。ここから二里半ばかり先のところで、農家をしている兄の家へ行こうとしようとったんです」。

ところが、止められたとです。「……誰が止めたのです？」「……薩摩の兵たちです。——その人たちが誰だったか分からんです。この橋にたどり着いたときに、欄干に寄りかかっている百姓姿の三人を見かけたんですが、てっきり農家の人たちだと思とったんです。その人らは、藁の大きな笠を被り、草鞋を履いていた。わしがその人らに丁寧な話しかけたら、一人が振り向いて、「……ここに居ろ！」と言った。言ったのはそれっきりで、他の者は何も言わなかった。それで、この人たちが百姓ではないと感づいて、わしは恐ろしくなりましたよ」。「……どうして農夫でないとわかったのです？」「……着ている蓑の下に長い刀を隠しておった——とても長いやつをね。みんな背がかなり高くて、橋に寄りかかって、川を見下ろしていた。わしもその人たちの傍にいました。欄干の左から三つ

めの柱のところ、ちょうどそこいら辺りに。その人らと同じように寄りかかっておったです。そこから動いたならば、たぶんこの人らはわしを殺すだろうと思っただです。誰もものも言わず、わしら四人は長いこと、欄干にもたれて立っておったです」と言う。

三、欄干にいた百姓姿の三人は、密かに馬に乗った士官を狙っていた

それは「……どれくらいですか?」、「……はつきりとは分からんがの、たぶん長い間だったでしょうな。町が焼けるのを見とった。誰もわしに話かけんし、見むきもせんで、皆川面を見つめとった。そしたら馬の蹄の音が聞こえてきた。馬に乗った士官が一人、あたりを見回しながら、速歩でやって来たそうです」、「……町の中からですか?」、「……そうです。旦那さんの後ろにある、その道に沿って……。男たちは大きな笠の下から士官を窺ったが、振り向かんかった。みんな川の中をのぞき込んでいる振りをしておった。ところが、馬が橋にさしかかったその瞬間、男たちは振り向きざま、躍りかかった。一人が馬の轡を捉え、もう一人が士官の腕を掴み、三人目が首を刎た。目にも止まらぬ手並みだった:「……士官の首ですか?」、「……ええ、切り落とされる前に叫び声を上げる暇もなかった……。あんな早業を見たのは生まれて初めてでした。三人の誰も一声も出さなかった」と言うのであった。

「……それから?」と聞くと、「……三人は胴体を欄干から川の中に投げ込んだ。一人が強くと叩きすると、馬は走り去ったです」、「……町の方へ戻ったのですか?」、「……いいや、馬は、橋をまっすぐ村の方へ駆けて行きよった。首は川へ投げ込まなかった。薩摩の連中の一人が、蓑の下に、持っておった。それから、また欄干に凭れて、先刻と同じように、川を見おろしておりました。わしの膝はもうがくがくしておったですよ。三人のおさむらいたちは黙ったままで、息をする音すら聞こえない。わしは恐ろしくてあの人たちの顔を見られなかった。それで川の中を眺め続けておったです。そのうちに別の馬の足音が聞こえてきた。すると心の臓がドクンドクンと高鳴ってきよって、気が悪うなつたとです。見上げると、道に沿って、馬に乗った士官がもう一人、かなり速くやって来る。橋のたもとに近づくと、誰も身じろぎもせず待っている。あつという間に、首が切り落とされた! 最前とまったく同じように、死骸は川に投げ捨てられ、馬は逃げていった。三人の男たちがこんな案配に斬り殺されて、おさむらいたちはこの橋を立ち去ったですた」と言うのであった。

四、あなたが目撃した、橋の上で殺された人たちは誰ですか?

それで「……一緒に行ったのですか?」、「……とんでもない。三人目の男を斬るとすぐに、おさむらいたちは、首を携えて去っていったが、わしには目もくれんかった。遠くに立ち去るのが分かるまでは、動くのが怖かったので、橋の上に留まったままだったです。それから、燃えている町の方へ走って戻った。――走りに、走りつたねえ! 戻ってみると、薩軍が退却しているという話を聞いたです。それからしばらく日にちが経って、東京から軍隊が到着しました。おかげで、わしは少し仕事にありついて、兵隊さんのために草鞋を運んだです」と言うのであった。

ところで、「……あなたが目撃した、橋の上で殺された人たちは誰ですか?」、「……知りません」、「……確かめようとはしなかったですか?」、「ええ」と平七は、また額の汗をぬぐいながら言った。「……あの戦が終わってだいぶ年月が経つまで、誰にも話さなかったですもん」、「……どうして話さなかったですか?」と私はなおも尋ねた。

平七は、驚いた様子で私を見ると、少し困ったような笑みを浮かべて、答えた。「……だって、それは悪いことじゃものな——他人に喋ったら恩知らずになったですたい」と、こう言われて、私は、自分の不分明さを気づかされた思いだった。

それから、私たちはまた旅を続けた。(完)

*

*

ろくろ首
(小泉八雲)

目次

小泉八雲の世界

ろくろ首

- 一、昔、九州菊池の侍臣に磯貝平太左衛門武連という人がいた
- 二、旅僧の回籠は、夜山で野宿していると一人の木こりに出合う
- 三、案内された山小屋で旅僧はろくろ首の家族に出合うのであった
- 四、旅僧は淋しい処で一人の盗賊に出合い衣類を脱ぐ事を命ぜられる
- 五、盗賊は、ろくろ首の崇りを恐れて、甲斐の山中へと首を返しに行く

※ 参考文献

ろくろ首

(小泉八雲)

一、昔、九州菊池の侍臣に磯貝平太左衛門武連という人がいた

五百年ほど前に、九州菊池の侍臣に磯貝平太左衛門武連という人がいた。この人は代々武勇にすぐれた祖先からの遺伝で、生れながら弓馬の道に精しく非凡の力量をもっていた。未だ子供の時から剣道、弓術、槍術では先生よりもすぐれて、大胆で熟練な勇士の腕前を充分にあらわしていた。その後、永享年間(西暦一四二九—一四四一)の乱に武功をあらわして、ほまれを授かった事たびたびであった。しかし菊池家が滅亡に陥った時、磯貝は主家を失った。外の大名に使われる事も容易にできたのであったが、自分一身のため立身出世を求めようとは思わず、また以前の主人に心が残っていたので、彼は浮世を捨てる事にした。そして剃髪して僧となり——回龍と名のつて——諸国行脚に出かけた。しかし僧衣の下には、いつでも回龍の武士の魂が生きていた。昔、危険をものともしなかったと同じく、今はまた難苦を顧みなかった。それで天気や季節に頓着なく、外の僧侶達をあえて行こうとしない処へ、聖い仏の道を説くために出かけた。その時代は暴戻乱雑の時代であった。それでたとえ僧侶の身でも、一人旅は安全ではなかった。

二、旅僧の回龍は、夜山で野宿していると一人の木こりに出合う

始めての長い旅のうちに、回龍は折があつて、甲斐の国を訪れた。ある夕方の事、その国の山間を旅しているうちに、村から数理を離れた、はなはだ淋しい処で暗くなつてしまった。そこで星の下で夜をあかす覚悟をして、路傍の適当な草地を見つけて、そこに臥して眠りにつこうとした。彼はいつも喜んで不自由を忍んだ。それで何も得られない時には、裸の岩は彼にとつてはよい寝床になり、松の根はこの上もない枕となつた。彼の肉体は鉄であつた。露、雨、霜、雪になやんだ事は決してなかつた。

横になるや否や、斧と大きな薪の束を脊負うて道をたどつて来る人があつた。この木こりは横になつている回龍を見て立ち止まつて、しばらく眺めていたあとで、驚きの調子で言った。「……こんなところで独りでねておられる方はそもそもどんな方でしょうか。……このあたりには変化のものが出ます——たくさんに出ます。あなたは魔物を恐れませ

んか」と言うのであつた。

回龍は快活に答えた。「……わが友、わしはただの雲水じや。それゆえ少しも魔物を恐れない。たとえ化け狐であれ、化け狸であれ、その外何の化けであれ……。淋しい処は、かえつて好む処、そんな処は黙想をするのによい。わしは大空のうちに眠る事に慣れておる。それから、わしのいのちについて心配しないように修業を積んで来た」と言う。

「……こんな処に、お休みになる貴僧は、全く大胆な方に相違ない。ここは評判のよくない——はなはだよくない処です。「……君子危うきに近よらず」と申します。実際こんな処でお休みになる事ははなはだ危険です。私の家はひどいあばらやですが、御願です。一緒に来て下さい。喰べるものと言つては、さし上げるようなものはありません。が、とにかく屋根がありますから安心してねられます」と言うのであつた。

熱心に言うので、回龍はこの男の親切な調子が気に入って、この謙遜な申出を受けた。きこりは往来から分れて、山の森の間の狭い道を案内して上って行った。凸凹の危険な道で、時々断崖の縁を通ったり、時々足の踏み場処としては、滑りやすい木の根のからんだものだけであったり、時々尖った大きな岩の上、または間をうねりくねったりして行った。しかし、ようやく回龍はある山の頂きの平らな場所へ来た。満月が頭上を照らしていた。見ると自分の前に小さな草ぶき屋根の小屋があって、中からは陽気な光がもれていた。きこりは裏口から案内したが、そこへは近処の流れから、竹の筧で水を取ってあった。それから二人は足を洗った。小屋の向うは野菜畠につづいて、竹藪と杉の森になっていた。それからその森の向うに、どこか遙かに高い処から落ちてくる滝が微かに光って、長い白い着物のように、月光のうちに動いているのが見えた。

三、案内された山小屋で旅僧はろくろ首の家族に出合うのであった

回龍が案内者と共に小屋に入った時、四人の男女が炬にもやした小さな火で手を暖めているのを見た。僧に向つて丁寧にお辞儀をして、最も恭しき態度で挨拶を言った。回龍はこんな淋しい処に住んでいるこんな貧しい人々が、上品な挨拶の言葉を知っている事を不思議に思った。「……これはよい人々だ」と彼は考えた。「……誰かよく礼儀を知っている人から習つたに相違ない」。それから外のものが「あるじ」と言っているその主人に向つて言った。「……その親切な言葉や、皆さんから受けたはなはだ丁寧なもてなしから、私はあなたを初めからのきこりとは思われない。たぶん以前は身分のある方でしたらう」と言うのであった。

きこりは微笑しながら答えた。「……はい、その通りでございます。ただ今は御覽の通りのくらしをしています。昔は相当の身分でした。私の一代記は、自業自得で零落（落ちぶれ）たものの一代記です。私はある大名に仕えて、重もい役を務めていました。しかし余りに酒色に耽つて、心が狂つたために悪い行をいたしました。自分の我儘から家の破滅を招いて、たくさんの生命を亡ぼす原因をつくりました。その罰があたつて、私は長い間この土地に亡命者となつていました。今では何か私の罪ほろぼしができて、祖先の姓名を再興する事のできるようにと、祈つています。しかしそういう事もできそうにありません。ただ、真面目な懺悔をして、できるだけ不幸な人々を助けて、私の悪業の償いをしたいと思つております」と言うのであった。

回龍はこのよい決心の告白をきいて喜んで主人に言った。「……若い時につまらぬ事をした人が、後になつて非常に熱心に正しい行をするようになる事を、これまでわしは見えています。悪に強い人は、決心の力で、また、善にも強くなる事は御経にも書いてあります。御身は善い心の方である事は疑われない。それでどうかよい運を御身の方へ向寄せたい。今夜は御身のために読経をして、これまでの悪業に打ち勝つ力を得られる事を祈りましょう」と言うのであった。

こう言つてから回龍は主人に「お休みなさい」を言った。主人は極めて小さな部屋へ案内した。そこには寢床がのべてあった。それから一同眠りについたが、回龍だけは行燈のあかりのわきで読経を始めた。おそくまで読経勤行に余念はなかつた。それからこの小さな寢室の窓をあけて、床につく前に、最後に風景を眺めようとした。夜は美しかった。

空には雲もなく、風もなかった。強い月光は樹木のはっきりした黒影を投げて、庭の露の上に輝いていた。きりぎりすや鈴虫の鳴き声は、騒がしい音楽となっていた。近所の滝の音は夜のふけるに随って深くなった。回龍は水の音を聴いていると、渴きを覚えた。それで家の裏の笥を想い出して、眠っている家人の邪魔をしないで、そこへ出て水を飲むとした。襖をそとあけた。そうして、行燈のあかりで、五人の横臥したからだを見たが、それにはいづれも頭がなかった。

直ちに——何か犯罪を想像しながら——彼はびっくりして立った。しかし、つぎに彼はそこに血の流れていない事と、頭は斬られたようには見えない事に気がついた。それから彼は考えた。「……これは妖怪に魅されたか、あるいは自分ほろくろ首の家におびきよせられたのだ。——『搜神記』に、もし首のない胴だけのろくろ首を見つけて、その胴を別の処にうつしておけば、首は決して再びもとの胴へは帰らないと書いてある。それから更にその書物に、首が帰って来て、胴が移してある事をさとれば、その首は毬のようにはねかえりながら三度地を打って、非常に恐れて喘ぎながら、やがて死ぬと書いてある。ところで、もしこれがろくろ首なら、禍をなすものゆえ、その書物の教え通りにしても差支はなからう」と思うのであった。

彼は主人の足をつかんで、窓まで引いて来て、からだを押し出した。それから裏口に来てみると戸が締っていた。それで彼は首は開いていた屋根の煙出しから出て行った事を察した。静かに戸を開けて庭に出て、向うの森の方へできるだけ用心して進んだ。森の中で話し声が聞えた。それでよい隠れ場所を見つかるまで影から影へと忍びながら、声の方向へ行った。そこで、一本の樹の幹のうしろから首が——五つとも——飛び廻って、そして飛び廻りながら談笑しているのを見た。首は地の上や樹の間で見つけた虫類を喰べていた。やがて主人の首が喰べる事を止めて言った。

「……ああ、今夜来たあの旅の僧、全身よく肥えているじゃないか、あれを皆で喰べたら、さぞ満腹する事であろう。……あんな事を言って、つまらない事をした。だからおれの魂のために、読経をさせる事になってしまった。経をよんでいるうちは近よる事がむつかしい。称名（念仏）を唱えている間は手を下す事はできない。しかしもう今は朝に近いから、たぶん眠ったろう。……誰かうちへ行って、あれが何をしているか見届けて来てくれないか」と言うのであった。

一つの首——若い女の首——が直ちに立ち上って蝙蝠のように軽く、家の方へ飛んで行った。数分の後、帰って来て、大驚愕の調子で、しゃがれ声で叫んだ。「……あの旅僧はうちにいません。行ってしまいました。それだけではありません。もっとひどい事には、主人の体を取って行きました。どこへ置いて行ったか分かりません」と言う。

この報告を聞いて、主人の首が恐ろしい様子になった事は月の光で判然と分った。眼は大きく見開き、髪は逆立ち、歯は軋った。それから一つの叫びが唇から破裂した。忿怒の涙を流しながらなった。「……からだを動かされた以上、再びもと通りになる事はできない。死なねばならない。……皆これがあの僧の仕業だ。死ぬ前にあの僧に飛びついてやろう。引き裂いてやろう。喰いつくしてやろう。……ああ、あすこに居る——あの樹のうしろ——あの樹のうしろに隠れている。あれ、あの肥とった臆病者」と言うのであった。

同時に主人の首は他の四つの首を随えて、回龍に飛びかかった。しかし強い僧は手ごろの若木を引きぬいて武器とし、それを打ちふって首をなぐりつけ、恐ろしい力でなぎた

ててよせつけなかった。四つの首は逃げ去った。しかし、主人の首だけは、いかに乱打されても、必死となって僧に飛びついて、最後に衣の左の袖に喰いついた。しかし回龍の方でも素早くまげをつかんでその首を散々になぐった。どうしても袖からは離れなかったが、しかし長い呻きをあげて、それからもがくことを止めた。死んだのであった。しかしその齒はやはり袖に喰いついていた。そして回龍のありたけの力をもってしても、その顎を開かせる事はできなかった。

彼はその袖に首をつけたままで、家へ戻った。そこには、傷だらけ、血だらけの頭が胴に帰って、四人のろくろ首が坐っているのを見た。裏の戸口に僧を認めて一同は「……僧が来た、僧が」と叫んで反対の戸口から森の方へ逃げ出した。

東の方が白んで来て夜は明けかかった。回龍は化物の力も暗い時だけに限られている事を知っていた。袖についている首を見た。顔は血と泡と泥とで汚れていた。そこで「……化物の首とは、何というみやげだろう」と考えて大声に笑った。それからわずかの所持品をまとめて、行脚をつづけるために、徐ろに山を下った。

直ちに旅をつづけて、やがて信州諏訪へ来た。諏訪の大通りを、肘に首をぶら下げたまま、堂々と濶歩していた。女は気絶し、子供は叫んで逃げ出した。余りに人だかりがして騒ぎになったので、捕吏が来て、僧を捕えて牢へ連れて行った。その首は殺された人の首で、殺される時、相手の袖に喰いついたものと考えたからであった。回龍の方では問われた時に微笑ばかりして何にも言わなかった。それから一夜を牢屋ですごしてから、その土地の役人の前に引き出された。それから、どうして僧侶の身分として袖に人の首をつけているか、なぜ衆人の前で厚顔にも自分の罪悪の見せびらかしをあえてするか、説明するように命ぜられた。

*

*

回龍はこの問に対して長く大声で笑った。それから言った。「……皆様、愚僧が袖に首をつけたのではなく、首の方から来てそこへついたので——愚僧迷惑至極に存じております。それから愚僧は何の罪をも犯しません。これは人間の首でなく、化物の首でございます。それから化物が死んだのは、愚僧が自分の安全を計るために必要な用心をしただけのことからで、血を流して殺したのではございません」と言うのであった。それから彼は更に、全部の冒険談を物語って、五つの首との会戦の話に及んだ時、また一つ大笑いをしたのであった。

しかし、役人達は笑わなかった。これは剛腹頑固な罪人で、この話は人を侮辱したものと考えた。それでそれ以上詮索しないで、一同は直ちに死刑の処分をする事にきめたが、一人の老人だけは反対した。この老いた役人は審問の間には何も言わなかったが、同僚の意見を聞いてから、立ち上って言った。「……まず首をよく調べましょう。これが未だすんでいないようだから。もしこの僧のいう事が本当なら、首を見れば分る。……首をここへ持って来い」と言うのであった。

回龍の背中からぬき取った衣にかみついている首は、裁判官達の前に置かれた。老人はそれを幾度も廻して、注意深くそれを調べた。そして頸の項にいくつかの妙な赤い記号らしいものを発見した。その点へ同僚の注意を促した。それから頸の一端がどこにも武器で斬られたらしい跡のない事を見せた。かえって落葉が軸から自然に離れたように、その頸の断面は滑らかであった。……そこで老人は言った。

「……僧の言った事は全く本当としか思われぬ。これはろくろ首だ。『南方異物志』に、本当のろくろ首の項の上には、いつでも一種の赤い文字が見られると書いてある。そこに文字がある。それはあとで書いたのではない事が分る。その上甲斐の国の山中にはよほど昔から、こんな怪物が住んでおる事はよく知られておる」。そして、回龍の方へ向いて、老人は叫んだ。「……あなたは何と強勇なお坊さんでしょう。たしかにあなたは坊さんには珍らしい勇気を示しました。あなたは坊さんよりは、武士の風がありますな。たぶんあなたの前身は武士でしょう」と言うのであった。

「……いかにもお察しの通り」と回龍は答えた。「……剃髪の前は、久しく弓矢取る身分であったが、その頃は人間も悪魔も恐れませんでした。当時は九州磯貝平太左衛門武連と名のつていましたが、その名を御記憶の方もあるいはございましょう」と言った。

その名前を名をのられて、感嘆のささやきが、その法廷に満ちた。その名を覚えている人が多数居合せたからであった。それからこれまでの裁判官達は、たちまち友人となつて、兄弟のような親切をつくして感嘆を表わそうとした。恭しく国守の屋敷まで護衛して行った。そこでさまさまの歓待饗応をうけ、褒賞を賜わつた後、ようやく退出を許された。面目身に余つた回龍が諏訪を出た時は、このはかない娑婆世界でこの僧ほど、幸福な僧はないと思われた。首はやはり携えて行つた——みやげにすると戯れながら……。

四、旅僧は淋しい処で一人の盗賊に出合い衣類を脱ぐ事を命ぜられる

さて、首はその後どうなつたか、その話だけ残っている。

諏訪を出て一兩日のあと、回龍は淋しい処で一人の盗賊に止められて、衣類を脱ぐ事を命ぜられた。回龍は直ちに衣を脱ぎ盗賊に渡した。盗賊はその時、始めて袖にかかつているものに気がついた。さすがの追剥ぎも驚いて、衣を取り落して、飛び退いた。それから叫んだ。「……やあ、こりゃとんでもない坊さんだ。おれよりもっと悪党だね。おれも実際これまで人を殺した事はある。しかし袖に人の首をつけて歩いた事はない。……よし、お坊さん、こりゃおれ達と同じ商売仲間だぜ。どうしてもおれは感心せずには居られない。ところで、その首はおれの役に立ちそうだ。おれはそれで人をおどかさずだね。売ってくれないか。おれのきものと、この衣と取り替えよう。それから首の方は五両出す」と言うのであった。

回龍は答えた。「……お前が是非と言うなら、首も衣も上げるが、実はこれは人間の首じゃない。化物の首だ。それで、これを買つて、そのために困つても、わしのために欺かれたと思つてはいけない」と言うのであった。

「……面白い坊さんだね」と追剥ぎが叫んだ。「……人を殺してそれを冗談にしているのだから。……しかし、おれは全く本気なんだ。さあ、きものはここ、それからお金はここに。……それから首を下さい。……何もふぎけなくつてもよからう」と言うのであった。「……さあ、受け取るがよい」と回龍は言った。「……わしは少しもふぎけていない。何かおかしい事でもしあれば、それは、お前がお化けの首を大金で買うのが馬鹿げていて、おかしいという事だけさ」とそれから回龍は大笑をして去つた。

五、盗賊は、ろくろ首の祟りを恐れて、甲斐の山中へと首を返しに行く

こんなにして盗賊は首と、衣を手に入れてしばらく、お化の僧となって追剥ぎをして歩いた。しかし諏訪の近傍へ来て、彼は首の本当の話を聞いた。それからろくろ首の亡霊の祟りが恐ろしくなつて来た。そこでもとの場所へ、その首をかえして、体と一緒に葬ろうと決心した。彼は甲斐の山中の淋しい小屋へ行く道を見つけたが、そこには誰もいなかった。体も見つからなかった。そこで首だけを小屋のうしろの森に埋めた。それからこのろくろ首の亡霊のために施餓鬼（死者の霊に飲食物を供えて経を読む供養）を行った。そしてろくろ首の塚として知られている塚は今日もなお見られる。（とにかく、日本の作者はそう公言する）（完）

*

*

「参考文献」

- ※底本「雪女」小泉八雲著（「青空文庫」）
- ※底本「狛」小泉八雲著（「青空文庫」）
- ※底本「葬られたる秘密」小泉八雲著（「青空文庫」）
- ※底本「耳無芳一の話」小泉八雲著（「青空文庫」）
- ※底本「幽霊滝の伝説」小泉八雲著（「青空文庫」）
- ※底本「忠五郎のはなし」小泉八雲著（「青空文庫」）
- ※底本「おしどり」小泉八雲著（「青空文庫」）
- ※底本「常識」小泉八雲著（「青空文庫」）
- ※底本「術数」小泉八雲著（「青空文庫」）
- ※底本「雉子のはなし」小泉八雲著（「青空文庫」）
- ※底本「おかめのはなし」小泉八雲著（「青空文庫」）
- ※底本「蠅のはなし」小泉八雲著（「青空文庫」）
- ※底本「死霊」小泉八雲著（「青空文庫」）
- ※底本「生霊」小泉八雲著（「青空文庫」）
- ※底本「お貞のはなし」小泉八雲著（「青空文庫」）
- ※底本「橋の上で」小泉八雲著（「青空文庫」）
- ※底本「ろくろ首」小泉八雲著（「青空文庫」）

*

*